神子上憲了著

真俗二諦領解文說教

顯道書院發兌

始

特233
433

真俗二諦領解文說教

序文

蓮如上人は若狭の二郎三郎に、そちの領解は如何にと仰せられたら、二郎三郎は、もろ〳〵の雑行雑修自力の心をふりすてゝと領解文の儘を出言せられました。其時上人は口と心と違はぬかやと仰せになつた。何と云ふ手嚴しい御訓誡でせうか。世の中には論語讀みの論語知らずが多い。領解文は美しく出言しても心口各異であつては、佛祖に對して寔に申譯が無いばかりでなく、自己出離の一大事を取り損ふことになつて、これ以上の悲歎はありません。

今此の領解文の法話は如上の意味に於て、一人でも多く心口相應のお同行が出來たらと云ふ念願のもとに執筆いたしました。一面に於ては、私に對する自警自誡の言葉とも考へてゐます。これによつて、同心同行の法友を得、俱に安養淨刹に生れて、永生の樂果を證得することが出來たら、これ程喜ばしいことはありません。

猶ほこの書は、先年嚴修された勝如上人傳燈奉告記念として起筆、いま亦御慶事記念

序文

として出版することが出來ましたのは著者に取つて無上の光榮たるのみならず、この光榮と喜悦を汎く一般の讀者各位にもお分ち致したいと存じます。

昭和十二年四月中旬

憲了識

目次

第一席……一
第二席……九
第三席……一八
第四席……二七
第五席……三八
第六席……四七
第七席……五六
第八席……六七
第九席……七六
第十席……八九

目次

第十一席……九八
第十二席……一一
第十三席……一三
第十四席……一三三
第十五席……一四
第十六席……一五八
第十七席……一七〇
第十八席……一八一
第十九席……一九二
第二十席……一九八

眞俗二諦 領解文說教

神子上憲了述

第一席

モロ〳〵ノ雜行雜修自力ノ心ヲフリステ、一心ニ阿彌陀如來、ワレラガ今度ノ一大事ノ後生、御タスケ候ヘト、タノミ申シテ候、タノム一念ノトキ、往生一定御タスケ治定トゾンジ、此上ノ稱名ハ、御恩報謝ト存ジヨロコビ申シ候。此ノ御コトワリ聽聞申シワケ候フコト、御開山聖人御出世ノ御恩、次第相承ノ善知識ノ淺カラザル御勸化ノ御恩ト、難有クゾンジ候。此上ハ定メオカセラルヽ御掟、一期ヲカギリマモリ申スベク候。

扨手、本月十一日より五日間は、待ちに待ちたる、勝如上人光照

猊下、第二十三世の法燈をつがせ給ひ、傳燈奉告會を御親修遊ばす勝緣にあひ奉ることは、御同容に慶びの中の喜び、之にすぎたることとは無い。門末一同信心歡喜の思ひに住して、稱名諸共御慶び申し上げることが、何よりの所詮と存じます。此の御法會を記念として御取つぎ申す次第であるが、讃題は、かねて聽聞の領解文とも、また、改悔文とも申し上げて居ります。中興大師蓮如上人、御一代御化導の中に於ても、一番肝要たる御文であります。そも〳〵此一通の御文は、かねて聽聞の通り、中興上人五十六歲の御時、叡山僧徒の嫉みに依りて、大谷本願寺を燒き亡ぼされ、都をあとに立ち出で給ひ、暫らく三井寺に御住居なされたが、此地にお住ひなされては御身あやうしと、越前さして御下向なされた。其事は、一帖目の御

文章にも、文明第三初夏上旬の頃より江州志賀郡大津三井寺の南別所邊より何となく不圖しのび出でて、越前加賀諸所を經廻せしめをはりぬ、と仰せらるゝ通り、差し當りて用事もない故、なにとなく人目にたつては悪いから、しのび出でて、と仰せられた。然るに越前吉崎には、文明三年より文明七年まで、都合五ケ年御逗留なされ此の領解文卽ち改悔文の御製作は、其五ケ年の間のこと。卽ち二帖目十四通の御文章に、夫れ、越前の國に弘まるところの祕事法門といへることは更に佛法にては無し、あさましき外道の法なり、これを信ずる者は永く無間地獄に沈むべき業にて徒事なり。この祕事を猶も執心して簡要と思ひて人を詔ひ賺さん者には相構へて〳〵隨逐すべからず、急ぎその祕事をいはん人の手を離れて、速く授くると

ころの祕事をありのまゝに懺悔して、人に語りあらはすべきものなり、と有つて、年時は文明六年七月五日とある。定めて此前後の御製作か、何となれば、祕事法門の人々が、廻心して、ありの儘に懺悔して、人毎に其詞が違ふ、そこで、其出言は此通りでよいと、書いて御與へなされたが、今此讃題の御文である。夫れより以來、當流安心のかゞみとし給ふ、然ればお互に、自督安心の龜鑑とすべきは、此御文に限ります。然るに、中興上人文明七年に吉崎を御發足あらせられ、京都へは立ち寄り給はず、若狹丹波の山越して、河内の國へ移らせられ、出口の里に三ヶ年御逗留遊ばし、其時また御同行の求めに依つて、再度此御文を書いて御與へなされたとある。斯の様に度々お與へなされたは、一流安心の

龜鑑とせよとの、御親切と思はねばなりませぬ。依之、東西の本願寺に於ては、毎年宗祖の御正忌にあたりて、改悔批判の御式には、此御文を用ひ給ふ。なほ又信惠院殿は、此御文を門末に配布し給ひ信入院殿之れに奥書を加へて、一宗の道俗にして、記憶せざる輩をきびしく御誡め遊ばし、ひしおきし此一通、四海の門末に授くるも吾自督安心の誤りなきことを、能く〳〵佛祖前に於て、敬白させんが爲なり、と仰せられましたぞ。然るに、此頃は、追々と此御文を出言する人が、少く成つて、何となく疎に相成りた様に見受ける。最も之は法門惑亂より、いらぬ遠慮するやうに成つたとも思はれる。然し、いたゞいて悪いものなら、本山に於ても、改悔批判はなさらぬ筈。又改悔文を遠慮するなら、御文章も遠慮せねばならぬ道理。

古語に、聲は心の響きなり、文字は心のかげなり、と申すが如く、今此御文は、上人御自督のかげ法師、我等が心の響きでなければならぬ、かげと響きの變りはあれど、響きとかげと生きうつし、いさゝかも變るところ有るべからず。青きは藍より出でゝ、藍よりも青く。氷は水より出でゝ、水よりも冷かなり。五帖一部の藍壺より、染めあげたる領解文、却つて元の出所の『御文章』よりも、其色は鮮なり。五帖一部の水がこほりて、領解文の氷となる、其領解文の氷は、八十通の『御文章』の、元の水より冷やかなり。之れに依りて、此領解文を龜鑑として、自督の安心をたゞさねばならぬ。凡そ眞宗の安心と云ふは、根本此領解文と申して可なり。此頃は、求道者と云へば、或は『歎異鈔』、或は『和語燈錄』、其他眞宗法要を本と

して、唯何となく、『御文章』や、領解文では澤山過ぎて、珍しきを好む風が有りますが、夫れが悪いと云ふでは無いが、『和語燈錄』等は淨土宗鎭西派にも用ひます。また、眞宗法要には、通佛法の儀式あり、一機一緣の法もあり、其儘いたゞいては大きに誤りを起すことがある。如斯、或は通途或は別途、何れも權化の利生、勝手にとりてはおそれ多い、之等の點より伺ふても、中興上人の懇切なる御化導、能く〳〵尊み味はねばなりませぬ。此故に、眞宗の安心は『御文章』領解文を輕く見てはならぬ。たとひ如何なる異安心が起りても、之を龜鑑といたゞけば、決して一流安心は狂いませぬ。現に、信明院殿の御時代にも、彼の名高い法門惑亂が有り終には時の公儀の沙汰となつた。其時、信明院殿は、助けたまへを、もとの漢字の、歸命

に戻して、夫れから高祖大師の、勅命に順ふことぢやと、明に御裁斷あらせられた。此事はかねて聽聞のことである。さあ皆さん、もとの高祖へ戻つて、中興上人の御言葉には、何とも釋明遊ばさぬは中興上人の御教化には、より以上にやわらげて、安く云ひ現はす御言葉が無かつたのぢや。此事は、『御一代聞書』にも、信心安心などいへば、愚痴なるものは、文字も知らざるなり、別のやうにも思ふなり、たゞ後生助け給へとたのめと云ふべし、いかなる人も聞いて信をとるべし、と仰せなされて御座る。此お言葉などから案じて見れば、此上安くは云はれぬまでに、かんでふくめて和げて、御教化下さる御遺訓であります。夫れに何ぞや、種々の義をつけて、六ケ敷く申しなすは、以てのほかの僻案と云はねばならぬ。斯かるお謂

はれ聞くにつけ、次第相承の善知識、此御文を外れた御教化は無い、釋迦一代の說教も、七祖相承の論釋も、祖師御一代の御化導も、此一文に缺ぐることなし、何卒能く〳〵聽聞して、唯の一人なりとも信心に住し、報恩慚愧誠忠仁愛、眞俗二諦の行者となり、愛國扶宗の身となるが、此法莚にあいたる所詮、之に過ぎたる喜びはなし。

第二席

モロ〳〵ノ雜行雜修自力ノ心ヲフリステ、一心ニ阿彌陀如來、ワレラガ今度ノ一大事ノ後生御タスケ候ヘトタノミ申シテ候。云々

叉手、前席より辯じかけた、讃題の領解文、御筆をお染め下され た、中興上人の御意志、竝びに御動機については、極めて簡單なが

ら、大略申し述べましたが、今席に於ては、中興上人の御一代、御苦勞下された、一端を讃嘆申上げます。夫れに就ては、先づ、我が淨土眞宗の源から少しくお話申しましやう。皆さまかねて御聽聞の通り、御一流の淵源は、印度靈鷲山の會座に於て、說き給ひたる、大聖釋迦牟尼世尊金口の說法、卽ち淨土の三部經、別しては大無量壽經、わけて要の第十八願、此本願のながれをば、龍樹菩薩天親菩薩、曇鸞大師道綽禪師善導大師、源信和尙法然上人、印度支那日本と、三國相承の七高僧、各此一宗を興行して、一器の水を一器にうつすが如く、明に傳へ給ふ下に於て、我れも信じて往生する、疑ひ晴て、本願を信ぜよ、彌陀をたのんで往生せよと、お先きに立つての御案內が、一宗開闢の御開山であらせられる。それよりこのかた

次第相承の善知識　たち代りいり代り當法主猊下に至るまで、實に二十三代に及び、あさからざる御勸化に依りて、我等が耳の穴から流し込んでいたゞくので有ります、「來て告ぐる人なかりせば衣手にかゝるたまをも知らずやありけん」之故、御開山善知識の御恩を、喜ばねば相成りませぬ。之に依つて、讃題の御文にも、此ノ御コトワリ聽聞申シワケ候コト、御開山聖人御出世ノ御恩、次第相承ノ善知識ノ淺カラザル御勸化ノ御恩ト、難有クゾンジ候。時に、御開山聖人の御苦勞は、各かねて承知の通り、今日の我等からは、想像も及ばぬ御恩があるが、代々善知識の御苦勞も、決して見のがしてはなりませぬぞ、殊に中興上人蓮如さまは、本願寺の勅號も、名のみに成り果、衰微も衰微、有つて無きが如く、火の消えたやうな本願

寺を、あらゆる艱難辛苦の下に、一流安心を宣明し給ひ、火に向つて油を灌ぐが如く、日夜に奔走あらせられ、未だ曾て見ざる、大本願寺の繁昌を遊ばしましたぞ。御滅後の今日まで、如何なる無學の人々にも、讀めば血の垂る如來の大悲が、切身に鹽の沁むが如く、届いて下さる御意を、嚙んで啣めて和げて、知らせて下さる御文章、朝夕御そだて蒙ることは、誠に涙なくしては居られませぬ。其上讃題の領解文、二諦宗旨の龜鑑まで、書いてのこして下さるからは、うかつに聽聞しては相濟みませぬぞ。さて、信證院殿蓮如上人は、人皇百一代　稱光天皇ノ御宇、足利義持治世の時代、應永廿二年二月二十五日、旭日東天に登るの曉、山城國愛宕郡東山の、粟田口青蓮院の南、大谷本願寺に、第七代の善知識、存如上人の嫡男として

御誕生遊ばされ、御幼名を布袋丸と申上げた。ところが、其當時の本願寺は、憲愿の賓も啻ならず、との生活さへ、思ひに任せぬ御貧困で有つた、夫れ故布袋丸さまは、と申すありさまにして、其日々々御生れ成さるとから、非常な御苦勞遊ばしましたぞ。其上御年齡六歳の、應永二十七年十二月二十八日、御生母公は御行く方しれず、お別れなされた。卽ち『拾塵記』に、蓮如上人六歳の時、常に住める所の妻戸をひらきて、供奉する人もなく、只一人行く方しらずうせ給ひぬ。依之、其日を爲ニ忌日一、上人もつぬに勤行せさせ給ひけりとしてあります。最もこの御生母公に付いては、古來其袋傳記が詳でないから、種々に臆測して、さまざまに申す者も有るが、兎に角、少か六歳の幼い御身が、只さゑ困難な御家庭に、母のない子として

取殘され、如何ほどかなしく思召したぞ」「親の無い子と磯邊の千鳥日暮〳〵に袖しぼる、」昔から言ひ傳ふ此うたの、其ま、の御氣持で在らせられたこと、、思はれます。春の花の前にも、世間の子供はやさしい母に手をとられ、花よ〳〵と喜び勇む其中に、布母丸さまは只一人、お母さま麿も花見に、思はず口ごもりては、御眼に涙、噫、麿の母さま何處へいた、夏は加茂川の夕涼み、螢狩する子を守る、よその母さん見給ふにつけ、噫、麿の母さま何處へいた、あはれもよほす秋の空、圓かに照す月までが、母さま戀しき涙に曇り、麿の母さま何處へいた、わけて木枯し寒き夜中には、麿の母さまは何故におかゑりなさらぬぞと、欷り泣き泣き夜をお明かしなされたであらう。殊に第二の母公に、冷たい素振のあるにつけ、御生生公

の離別の御言葉、布袋丸殿、はやく成人あそばして、御開山聖人の御一流を、屹度再興したまへよ、之ばかりが母の念願、第八代の善知識と、成らねばならぬ麿の勤めぢや、夫れには必ず艱難苦勞、悲しいことも有ろうけれど、御開山聖人の御苦勞を思へば、此本願寺はつぶされませぬぞ、母なきあとは此言葉を、此母と思召せ、此御遺言を思ひ出しては、暖かい生母公の懷ろを、偲び泣き給ひて、深く御所存を堅められ、いや〳〵、麿は泣いては居られませぬ、此生母公の言葉を力に、如何なる苦勞に會ふとも、昔に勝る本願寺と、成さずにおこうかおくべきかと……七八歲の御時分から、唯夫れのみの御希望で有つた。然るに其當時の我國は、新田足利の將軍爭ひより、京も田舍も亂世つゞき、血生臭き風は吹きしきり、日夜に

戰いの絶え間なく、遠國近國の御門徒も、御本山へ參詣することも叶はず、從つて一錢の御冥加も、差し上ぐる者もない始末、夫れ故御年齡八歲まで、御習字さへも成さることが、出來なんだとある。之を見兼ねて、下間丹後、時勢とは申しながら、此儘には致して居られぬと、丹後夫婦が手內職して、僅ばかりの賃錢を儲けて、御不自由には御座りましやうが、何事も時節と思召し、御堪忍あそばせと、涙ながらに布袋丸樣を御供して、御年八歲の冬、初て、能書竹原安藝の門に、御入學成されたとある。ところが、僅の筆墨料さへおくれ勝ち、二月も三月も滯る、夫れ故、御いたはしや、布袋丸さまは、筆墨お求め成さることがならず、或時は、小ずみをといて習はせられた、又或時は、藤のかづらを筆ほどに切られて、小石で其

先きを打ひしぎ、夫れにて御習字成されたと有る、今に名高き藤筆の名號は、全く其頃の記念と思はれます。斯かる御不自由の中から、一流再興の御念願は、益强く愈堅く、數多の兄弟子を追こして師匠も驚嘆するばかりで有つた。さて、十七歲の永享三年、粟田口青蓮院にて、剃髮得度遊ばして、御名を兼壽と改め給ひ、血氣火と燃る青年の上人は、大悲傳化の聖行に向つて、全ての力を傾けられました。斯くて悲慘や迫害が、御身に加はれば加はる程、不撓不屈の御精神が加はり、愈一宗再興の大道へ、一步々々御進み成されましたぞ。さあ、皆さん、斯かる御苦勞聞くにつけ、今日の私共は意氣地が無い、眞實々々慚愧に堪へず、まこと上人の御恩に目覺め、內に一流の信心をたくはへ、外に時代の迫害を退ぞけ、如來の大悲

教主の金言、宗祖の化導中興の精神、道俗時衆同心して、唯此上人の教を信じ、實踐躬行以て自信教人信し、當法主猊下を仰ぐこそ、此法莚に會はれた所詮、之に過ぎたる喜びはない。

第三席

モ・ロ〳〵ノ雜行雜修自力ノ心ヲフリステ、一心ニ阿彌陀如來、ワレラガ今度ノ一大事ノ後生御タスケ候ヘトタノミ申シテ候。云々〳〵

又手、引續いて聽聞の讃題の御文、此お座では、其題意に就て、おとりつぎ致します。題意とは、標題の意義と云ふこと。標題とは改悔文或は領解文と、申して居る題號のこと。意義と云ふは、其題號に含むわけ、之れを意義と云ふ。古から、題は一部の總標と申し

て、表看板の藝題に、忠臣藏と揭げて有つたら、中の芝居は、赤穗義士のかたき討ち。今此讃題の御文の標題、改悔文或は領解文、皆な之れ御文のお意を、總括された名まへである。先づ、改悔文と申すことを、辯じませう。改悔と云ふ御言葉は、廻心の場合に用る言葉にして、卽ち御文章に、各々〳〵に改悔の心を起して、眞實信心にもとづくべきものなり、と仰せられて、日頃のあやまれる心中を、ひるがへして、御正意の安心に、もとづいた上から、申し出す御文なるが故に、中興上人の御言葉を用ひて、改悔文と名づけ奉る。扨、中興上人、改悔と仰せられたのは、覺如上人のお式文に、遂ニ令ム改悔之族一同稻麻竹葦、と有る御文にお依りなされたもの。其他、『觀念法門』『觀經の疏』『涅槃經』にも、改悔と云ふお言葉が有る。すべて

廻心する時に用ひてある。夫れでは、廻心とは如何なることか、之れは廻心懺悔と續く文字で、つまり懺悔すること。夫れなら、懺悔文と云ふても、よからうに、改悔文とは何故云ふか、さあ、其點が有り難い、通佛法自力の懺悔と、絶對他力の廻心懺悔とは、全然其の格がちがう。自力の懺悔は、畢竟、廢惡修善である。今云ふところの改悔とは、其廢惡修善の意志までも、ふりすてゝ改めることで有りますぞ。そこで、唯だ懺悔と云はずに、改悔文と名け奉る。全體、自力の懺悔と云へば、儀式作法が有つて、如來の御前や、大衆の面前に於て、發露懺悔と申して、我身の犯した罪惡を、告白して懺悔する。其懺悔にも種々有つて、『禮讃』には、上中下の三品が出て居ります。上品の懺悔は、全身の毛孔より、血の汗を流し、兩眼よりは、黑血の涙を出す、中品の懺悔は、全身の毛孔より、熱湯の汗を流し、兩眼より血の涙を出す。下品の懺悔は、兩眼より熱き涙を流すとある。然るに、吾淨土眞宗に於ては、血の汗血の涙を、流す程の懺悔は要求なさらぬ。自身はいよ〳〵貪瞋邪僞、奸詐百端の惡人なりき、かゝる惡機を此儘にて、鶴の足の長きを斬れよでなく、鴨の足の短かきを繼げよでなく、口も體も心も苦にさせぬ、其儘ぢやぞよ、とよびかけ給ふ大悲の敎命、一心無疑といたゞく一念、血も涙も無い懺悔が、血と涙に盈ちた懺悔にも、劣らぬ懺悔と成るのである。爰を宗祖大師も、眞心徹到する人は、金剛心なりければ、三品の懺悔する人と、ひとしと宗師はのべたまふ、と御敎化下された。此お意がきこゑて見れば

噫、こんな御慈悲と知らずして、親様泣かせた勿體なさ、あやまりはて丶慶ぶばかり、之れを中興上人は、各々に改悔の心をおこしてわが身のあやまれるところの心中を、心底にのこさずして、當寺の御影前において、廻心懺悔して、諸人の耳にこれをきかしむるやう、毎日毎夜にかたるべし、と御教化なされて有る。之れに依つて當流の改悔懺悔は、罪の沙汰むやくとなりて今は早や、佛智不思議の沙汰ばかりなり。若しも耶蘇教に云ふ、懺悔の如く、罪惡を悔い改めよとか、自力聖道の懺悔の如く、發露懺悔して、二度其罪惡を犯してならぬとか、御註文が有つたら、今日の我等は迚も助からぬ。何故かと云へば、私共は、二度嘘つかぬと誓ひもたてられず、二度と殺生せぬとも云はれぬ、誓ひはたて丶も、云ふは云ふても、なか〳〵

實行の出來る根機ではない。なければ、二度其罪を犯したら、佛祖善知識を欺したことになる、夫では却りて罪のうは塗り。『大論』に、氷をとかさうと欲ふて、熱湯をそゝぎかけ、一夜明けて見たら、氷は昨日よりも厚くなりて居た、と云ふ喩があげて有るが、如何に誓ふても、起請は入れても、又た其罪を犯す時は、罪はいよ〳〵重くなる。つく〳〵我機を見つめて見れば、唯の一つも懺悔は出來ぬ。たつた一つ出來るのは、佛智疑ふ罪ふかし、この心おもひしるならば、くゆるこゝろをむねとして、佛智の不思議をたのむべし、一度本願の謂れ聞き開いたら、臨終まで相續して、疑ひ度くても疑はれぬ、腹の据りたが金剛心。然かし、宿業や懈怠が頭を擧げると、之では往生如何と危ぶむ、夫れは、己のが嬉しい心を賴んで、佛智の

不思議をたのまぬからぢや。仍で、嬉しい時にころり死に度い、夫れが改悔のなられぬ證據。改悔の出來た證據には、此世は宿業故見とめがつかねど、未來は本願力の故に見とめがつき、改は一念悔は相續、昨日の疑に打ち勝つた、今日の嬉しさ慶しさ、何故に今まで知らなんだやらと、言ひ出しては悔み、語り出しては喜び、相續が出來ますぞ。仍で、聖道自力の廻心懺悔は、惡を止めて善を修する、今淨土他力の改悔と云ふは、惡と知りつゝ止められず、善と知りつゝ、積れもせず、必定墮つる私を、助け給ふ親樣なりしと、至心信樂己を忘れて、仰いで佛智をたのむこと。此故に善導大師は、謗法闡提廻心皆往、法照禪師は、但使廻心多念佛、龍樹菩薩は、歸命本願力、天親菩薩は、一心歸命と改悔なされて御座る。是をまた『執持

鈔』には、おのれがなすところの善をもて、かの阿彌陀佛の報土へむまるゝこと、かなふべからずとなり、惡人またいふにやおよぶ、己が惡業のちから、三惡四趣の生をひくよりほか、豈報土の生因たらんや、しかれば善業も要にたゝず、惡業もさまたげとならず、と御教化爲されて有る。而て見りや、善人でも惡人でも、我機の方の世話やめて、佛智不思議をたのむより、ほかに往生の道は有りませぬぞ。これを廻心懺悔とも、弘願眞宗不共の改悔とも仰せられた。此意を中興上人、彌生中半の御文章には、此女人達其外の人申されけるは、まことに我等が根機にかなひたる、彌陀如來の本願にてましく候をも、今迄信じまゐらせ候はぬ事のあさましさ、申すばかりも候はず。と聞かぬ昔の我身をくやみ、今より後は一向に、彌陀を

たのみまゐらせて、ふたごゝろなく一念に、我が往生は、如來のかたより、御助けありけりと信じ奉つて、其後の念佛は佛恩報謝の稱名なりと心得候べきなり。聞えた今日の喜びは、何時取出しても、往生一定の喜びぢやと仰せられた。成る程、改悔の改と云ふ字は、己を攵つと書いた文字で、片の己は自力なり、つくりの攵は他力なり。自力とは、雜行雜修自力のこゝろ。他力とは、ふりすてゝ一心に彌陀たのむ。たのまれた證據には、往生一定御助け治定と存じ、此上の稱名は御恩報謝と存じ喜び申し候。此故に、信入院様の奥書には、眞宗念佛行者、已に一念歸命の信心發得せる了解の相狀なりと御したゝめ成されて有る。已にとは、前つかた、得られた信の仕合を、一期の間出言して、懈怠の心に鞭をあて、我機の方は常慙悔嬉れし恥かしの思ひより、申し出して喜ぶが、今讃題の御文なるが故に、此お意を總括して、改悔文とは名づけ奉る。餘り長座になりまする故、暫く休息して後席を辯じます。

第四席

モロ〳〵ノ雜行雜修自力ノ心ヲフリステ、一心ニ阿彌陀如來、ワレラガ今度ノ一大事ノ後生御タスケ候ヘトタノミ申シテ候。云々

叉手、前席に於ては、改悔文と云ふ、題意について、大略辯じましたが、此お座では、領解文と云ふ、意義について、御取次ぎに及びます。此領解文とは、信入院殿文如上人、天明七年の春のころ、此御文に奥書し給ひ、あらゆる全國の御門徒へ、戸毎々々にお授け

成された。其奥書に、領解出言の文、とおしたゝめ成された。夫よりこのかた、御一派に於ては、領解文と申し來つたやうに、聞き及んで居ります。之れについて、世の中には、領解文と申すことが、何か異解の容に言ひなす者があり、亦た、同じ一流の中に、一方では、改悔文と申し、一方では、領解文と申すなど、どうもおかしなものだ、と申す人がある。然し、之れは、一體上の差別名と申して改悔の名から申せば、獲信の始、領解の名から申せば、獲信の終、何故なれば、宿善開發して、善知識にあひ、本願名號の謂を聞きひらき、佛智廻向の大信を獲得する、其初歸の心相を尋ねて見れば、聖道權化の方便に、久しくとゞまりて、流轉輪廻の身と、迷ひしことの淺間布さよと悔み、今度こそは、彌陀他力の願船に乘じ、定て

往生すること得ると、雜行雜修自力の心をふりすてゝ、他力廻向の信心ばかりにて、と、改むる意味から申せば、獲信の始とも見え、改悔と申すが、適切である。また、生死出離の一大事は、彌陀大悲の願力一つで、必ず救ふの仰せの下に、疑なく一心に阿彌陀如來、我等が今度の一大事の後生、御助け候へと、あなたの御助けを、眞受けにして、御恩喜ぶ意味から申せば、獲信の終りとも申され、領解と申す名に相應する。此故に、改悔と領解とは、一體であり一時であり、何れも防げなき題號であり、其意義には、決して相違は有りませぬ。時に、領解と云ふは、領受解了とつゞく文字で、領受とは、領納とも、受納とも申して、つまり、受取ると云ふこと、受取るとは、どなたから、何を受取るか、受取る衆生に、受取る丈の、

資格が有て受取るのか、資格どころか、思ひもよらぬ、我等に代りて大悲の彌陀が、法體成就の名號を、至心廻向と我等に賜はる、生死出離の至要、往還二種の廻施ものを、善知識の取次ぎにより、定得往生と領納し受取る、卽ち、拜領する意である。拜領なら、下人民から、願ひ出ていたゞくことではない。產んだ子にさゑ遠慮があり、嫁や孫にもきがねする、眼汁鼻水の老人に、上朝廷の優渥なる御思召によりて、天盃を下賜し給ふ。取次ぎは、知事や市町村長なれど、何とて忠誠をぬきんでた、覺えも無い此老ひぼれを、國の親様なればこそと、聞くなり、喜ぶなり、拜領するなりの味である。夫を何ぞや誤りて、衆生の方より、阿彌陀如來様へ、御安心を献上するやうに、心得て居る人がある。それでは、眞實の信心は得られ

ませぬぞ。御當流は、彌陀如來の方より、授けます信心を、唯だ、我等凡夫は領受と拜領するばかりである。次に、解了とは、解は、解脫、了は、了慧とつゞいて、平たく申せば、解はとける、脫はまぬがるゝ、了慧とは、あきらかにさとる、と云ふこと。其、とけるとは、何が解ける、まぬがるゝとは、何を脫がるゝ、又、あきらかにさとる、とは何をさとる。逃げて廻りた私を、追ふて廻りて下された、逆さまごとの御慈悲なら、唯だあい〳〵とうつむく一念、無始已來つくりとつくる惡業煩惱を、のこるところもなく、願力不思議をもて消滅するいはれあるがゆゑに、長の迷ひの束縛も、其一念にさらりと解け、武裝しながら正定聚、算盤片手も不退轉、工業農業働くまんま、長く生死苦まぬがれて、煩惱菩提體無二と、すみ

やかにとくさとらしむ。煩惱を斷ぜずして、涅槃をうと、念佛三昧行してぞ、罪障を滅し度脫せしと、往生一つは、あきらかに、自からさとりた聖者より、疑なく思ふて喜ぶ身に成たは、卽ち解了の姿である。此故に、領解と云ふは、卽ち當流の肝要たる、信心の異名であります。此信心卽ち領解が得られたら、貧富貴賤男女老少、憂きことの多い、現代の生活にも、獨微笑む、心に歡喜多き活動が出來ますぞ。中興上人諸處御化導の砌、江州打出の濱より船にめされ伊吹山を眺めながら、お渡りなさる時、櫓をおして居る船頭、年齡も七十の上と見え、藥鑵頭に殘るは白髮、汚れ手拭ひ鉢卷して、破れどてらに繩帶しめ、荒逞ましひ老爺だが、掛聲一つかけもせず、歌なら一節うたいもせず、櫓を押し櫓をひく拍子にも、唯だ、南無

阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と、念佛しながら。櫓を押して居る。上人は屋形の內から、其念佛の聲を聞こし召され、鳴呼、他力御催促のお稱名とは申しながら、鬼みたやうなあの親爺が、稱名三昧で櫓を押すとは、鬼がほとけとは此ことぢやと、大きに御感心あらせられ、御自分もともにお稱名。親爺が、南無阿彌陀佛と、申せば、上人も、南無阿彌陀佛、船頭と上人と、掛け合ひのお稱名御相續、上人御感のあまり、「おゝい、船頭さん、先刻から聞いて居れば、折角心配して船を動かすのに、掛け聲もせず歌もうたはず、念佛三昧で櫓を押して居るが、全體、お前は、どんな心持ぢや」とお尋ねなされたら親爺は、「はい、鉢卷しながら御免なされ、後面ながら御許し下されお見かけ通りの此老人、破れどてらも今暫く、聽てのうちに應報妙

服、禿頭も瑠璃の寶冠、麥の冷飯も今暫し、追つけ淨土で百味の飮食、何事かげぬ衣食住、揃ひに揃ふた萬德圓滿、末賴母敷い身の上と、成し下された御大恩、逆背におどりて喜ぶべきを、行住座臥はゑらばぬと、お慈悲の御免を蒙りまして、勿體なけれど鉢卷しながら、御恩を喜ばさせていたゞくので御座ります」聞こし召されて中興上人、いよ〳〵御感心遊ばされ、「うん、夫れは誠に殊勝なこゝろがけぢや。時に、船頭さん、あの向ふに見えるのは、あれは何と言ふ山かいの」。「へえ、あれは、音に名高い、江州の伊吹山で御座りまする」「うん左やうか、隨分高い山ぢやの。ところで、船頭さん、あの伊吹山程、一兩小判を積み重ね、そなたへ進ぜると云ふ人があつたら、嘸ぞ、嬉しいであらうの」、と仰せらるれば船頭は、「是れはまた途方も無いこと仰つしやりまして荒浪の上、風雅でも洒落でも御座りませぬ。其お金が欲しさに此渡守、伊吹山程金子貰ひましたら、破れどてらにひきかへて、綾や錦の裝束つけ、本宅別邸立派に構へ、きぬ座布團にどつかとすはり宣德火鉢にきり炭くべ、鐵瓶かけて上茶をのみ、數多出入の者共に思ふ存分施こして、旦那樣ぢやの親方ぢやのと、人に頭を下げさせて、榮耀榮華自由氣儘の、出來る金子貰ふて、嬉しう無いことが御座いましやうか。御出家さん、あなたも、よいかげんな冗談を言はつしやるわいのう」「いや船頭さん、そこぢや、今其伊吹山程の金子貰ふた嬉しさと、彌陀の御慈悲の有り難さと、二つ並べたら、何方が嬉しからうかのう」、と聞くなり親爺は櫓を押し止め、鉢卷とりて

上人の御前に、白毛頭を船板に打ちつけ、兩手つかへて、涙ながらに、「噫、私にも大勢の子供に大勢の孫、孫や子供は多けれど、父さん後生の一大事は、安心の心得は如何と、尋ねて呉れたことは御座りませぬ。夫れにあなた樣は、此度の一大事を、心得違ひして仕損じてはと、また繰り返し〳〵、此親爺奴の心得振りを、御尋ね下さる御親切、千萬有り難ふ存じます。無骨ながら一首やりますわい」、と歌をよむ、「嬉しさを、伊吹山ほど積む金に、かへぬ未來の後のたのしみ」「伊吹山は愚か、富士の山程の金貰ひましても、高の知れた五十年か六十年か、死んで仕舞ゑば、全くの丸裸、今度の淨土の仕合は、いのちは長く無量壽の、應報妙服も盡未來際、百味の飲食も無量永劫、宮殿樓閣も萬劫末代、儲けて損する怪我の無い、何より

彼より嬉しひは、大悲廻向の御恩德で御座りまする」と、歡喜慶喜の涙を流し、勇ましく喜ばれたとある。皆さん、此船頭と上人との、船の上での御緣をば、昔噺と聞いてはなりませぬぞ。今讃題の領解文、書いてのこして下されたは、人の一生は船路の如し、殊に五濁の末の世なら、苦しい悲しひ口惜しひ、憂き世の浪も、非常の風も免れ難きは生死の苦海、一世の勤苦は甘んじて、而も感謝と慚愧にみち、眞に生き甲斐ある生活は、六字の謂れ聞く一念、信心領解の身となりて、一大理想の彼の岸を、期し樂しむの信仰なくば、とても獲られぬ覺悟ぞと、教へて下さる御教化なれば、此御文を龜鑑として、一流の道俗もろともに、急いで一味の信仰に住し、進んでは迷へる同胞を誘ひ、退いては自己の幸福を喜び、濁れる世界を淨化

して、理想の樂園たらしめるが、此御遺文をいたゞく所詮、現代に於ける眞宗の勤め、是に過たる喜びはなし。

第五席

モロ〳〵ノ雜行雜修自力ノ心ヲフリステ、一心ニ阿彌陀如來、ワレラガ今度ノ一大事ノ後生御タスケ候ヘトタノミ申シテ候。云々

扨手、引き續いて聽聞の領解文、前席前々席に於ては、題號の意義に就て、大略申し述べましたが、參詣の皆さんの中には、そんなことなら、疾くより承知、三歳兒の時から、領解文は覺へて居る。今更聽聞せんかとて、何も彼もよく聞いて、存知て居ります、と言ふ感じをなさる方が、必ずお在りのことゝ思ひます。是れは無論然

様有つて欲しい。夫れが反對に、御門徒ではあるが、領解文なんて一向存じませぬ、と言ふ方が、萬に一人でもありましたら、これを御緣に、よく心得ていたゞき度い。然し、中興上人は、若狹の二郎三郎に、そちの領解は如何に、と仰せられたら二郎三郎、もろ〳〵の雜行雜修自力の心をふりすて、一心に阿彌陀如來、われらが今度の一大事の後生御たすけ候へと、たのみ申して候乃至此上は定めおかせらるゝ御掟一期をかぎり守り申すべく候、と領解文の儘を出言せられた。其時上人のお言葉に、口と心とは違はぬかや、と仰せられたとある。さー皆さん、此お言葉は、皮肉と思はれるか、御親切と思はれるか、決して昔噺しではない。今日のよく承知させていたゞいて居る私へ、上人は常に口と心とは違はぬかや、と仰せられ

て居りますぞ。嘗て澁澤榮一翁は『論語』と算盤とが一致すれば、人間の世界は樂園と成ると、申されましたが、成る程、名言である。世の中一般の人が、皆な『論語』の精神を體得して、實踐躬行致しましたら、誰も彼も仁義忠孝の人ばかりで、此世は君子の世界と成つて疑獄もなければ、詐僞も無い、横領も强盜も殺人も、不正は一切無く成て、眞に濁り無き樂園と成る。然し、昔から言ふ、『論語』よみの『論語』知らずが、兎角世の中に多いから、國家、社會、家庭、團體、個人の、各階級を通じて、いまはしき醜態を暴露すること、誠に殘念なことゝ存じます。夫れは其筈でも有る。と申しますのは、『論語』は讀まぬ者も有るが、今日帝國の國民として、『論語』よりも『大學』よりも、優に勝れた一大教訓、明治大帝より賜はりし、國民教育の御勅

語は、誰一人として、拜承し奉らざる者は有りませぬ。また、知らぬ存ぜぬでは居られぬまでに、國家の教育は普及されて有る。其證據は、小學校一年の兒童でも、「坊ちやん、教育の御勅語は知つて居ますか」問ふて御覽なさい、「はい」、と云ふなり、寢そべつて居た兒なら、起き直り「存じて居ります」と答へる。「夫れでは捧讀して御覽」と申せば、直立不動の姿勢を以て、謹嚴に捧讀致します。實に教育はゆきとゞいて居ります。然るに、國家最高の學府を出た、立派なはずの連中から、勅語讀みの勅語知らずが、あとへ〳〵と飛び出すことは、誠に恐懼に堪えぬ次第である。また、私共の上に反省して正しく御勅語の御精神を體得して、實踐躬行して居りましやうか。他人ごとではない、一人々々が反省修養して、以て、聖旨にそひ奉

らねばならぬこと丶存じます。夫れと之れとを比較して、お話し申すことは、甚だ畏れ多いことなれど、今眞宗の我々も、領解文も出言して居る、正信偈御和讃御文章、毎朝毎夕暗誦して居る。夫程御教化は、行き届いて居る、聲やすがたは、誠に眞宗御繁昌だが、一たび一人々々の心中や、日常の生活を、正直に詮議したならば、實際、御繁昌で有うか。眞に寒心に堪えぬ、寂しさでは有りますまいか。それでは、中興上人や、大善知識に對して、相濟まぬばかりでなく、一人々々の安定が出來ませぬぞ。彼の越中より出られた、明教院僧鎔和上は、今より百五十年前の人で有るが、まことに有り難ひ學者で有つて、此の改悔と云ふに付いて、四句分別して後學を戒しめて御座る。一つには、改悔の不改悔、二つには、不改悔の改悔、

三つには、改悔の改悔、四つには、不改悔の不改悔なり、と申された。すなはち、領解の不領解、不領解の不領解とも、申される譯である。先づ、第一番の、改悔の不改悔とは、改悔文卽ち領解文は、よくそらんじて居り、義理分別もしりて居りながら、信心にうと〳〵しき者のこと。第二番の、不改悔の改悔とは、此御文の出言どころか、正信偈御和讃のおつとめも出來ず、至りて鈍根の人なれども、うつくしく信心領納して、往生一定の御恩を喜び、俗諦世間の行狀まで、うるはしく生活する者のこと。第三番の、改悔の改悔とは、此御文の出言はおろか、廣く一宗の安心に通じ、學者と言はれる人なれども、往生の一段に付ては、唯だ大悲の誓願不思議を仰ぎ信じて、佛恩師恩の廣大なることを慶び、

無我に念佛相續する人のこと。第四番の、不改悔の不改悔とは、人眞似仁義の寺參り、長けりや退屈、堅けりやあくび、わけもわからず、信心もない、一向もの知らず、無頓着の、眞宗とは其名ばかりの人。さー皆さん、お互ひは、此の四種の中、何番目の部類で有りませうか。第一番と第四番とは、仲間入りしては成りませぬぞ。第二番と第三番は、誠に尊ひ仕合せである、と申して、今から大學者にも成れず、改悔の改悔は、些と不向き、夫れに、元來眞宗の學問は、他の學問とは異つて、修めた學問の力で、道を開くのではない、いよ〳〵眞宗學の終極は、我身は惡ろき愚か者で有つた。斯かる淺間布き私を、助け給ふは南無阿彌陀佛ばかりぞと、仰ぎ信じて慶ぶばかり、之れから思へば、私共は、不改悔の改悔が、最も適當、善

知識の教への下に、不思議の佛智を信ずるより、他に助かる道はない。學問の勝れた和上方が、改悔の改悔なさる仕合も、聞いた下から忘れる我等が、不思議の佛智をたのむ、不改悔の改悔も、結局は同一念佛の仕合なら、仕合者は私一人、私一人が正客とは、何たる御慈悲の御宗旨ぞと、喜ばずには居られませぬ。夫れに就いて、先年なくなられた是山和上、長く當大善知識の保傅として、奉仕なされ、また、一派宗學の上には、近代に稀な學者で在つたが、なくなられる二三年前から、中風症に罹られ、身體の御不自由は無論、朝夕勤行の正信偈和讃すら、きれいに忘れて仕舞はれ、奥様が大きなお聲で、助音なさらぬと、次ぎが出てこぬ容態、奥様は、ほんに、あの博學強記な和上で有つたが、いかに病氣のせいとは申しながら

此容態は何事ぞ。萬が一後生の一大事、仕損じ給ふ樣なことはないかと、流石、是山和上の奥樣だ、おこゝろがゝりの儘、或る日、和上にお尋ねなされた。「和上さん、あなたは、あれほど何も彼も、御記憶のたしかなお方で有りましたのに、病氣の爲めとは申しながら何も彼も皆な御忘れのやうで御座りますが、只た今おはてなさるとなりましたら、今度の後生は如何で御座りますか」、と眞劍にお尋ね成されたら、是山和上、につこり笑ふて、「これ奥よ、知つた學問で參るぢやないぞ、往生の一大事は、南無阿彌陀佛のお六字のお一人はたらきぢやわい、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」と、涙ながらに喜ばれた。此お言葉に奥樣も、「あゝ、ほんにさやうで御座りました。それでこそ、何も覺えぬ妾も、お伴をさせていたゞきます」と、大聲

あげて喜ばれたとある。記憶確かな學者にして、改悔の改悔になれた和上は、皆な忘れても不改悔の改悔、記憶も出來ず、學者にも成れず、聞いた下から忘れる我等は、忘れる世話なし、不改悔の改悔、眞實信心にもとづくが、眞宗安心の至極で有る。此道理が聞えたら、領解出言文義の沙汰知つたばかりが本意で無かつた。領解讀みの領解なしでは濟まなんだと、中興上人の御正意を汲み、佛恩師恩皇恩國恩、麗はしく報ずる身になるが、此法莚にあひたる所詮、是れにすぎたる喜びはなし。

第六席

モロ〳〵ノ雜行雜修自力ノ心ヲフリステ、一心ニ阿彌陀如來、ワレラガ今度ノ一

大事ノ後生御タスケ候ヘトタノミ申シテ 候。云々

又手、今席より、御文の大意に就て、お話し致します。此御文を四段に見込んで、安心報謝師徳法度とうかゞふことは、泰巖師が、はじめて見こんでより、永く一宗の宗式と成り、布教使が、一席の法話を致すにも、必らず、此四つの科段を揃へて、お話し申すが一宗の御寺法で有ります。最も、中興上人御遺訓の、御文章の上では此四段が、揃ふた御文もあり、又た、揃はぬ御文もあります。特に二帖目第六通の御文章などは、全く法度ばかりを、お示し成されたものにして、夫故、掟の御文章と申し來りて居ります。我が本山に於ては、此掟の御文を以て、年の始めの、御影堂說教と定めてあります。之れは何づれ、王法を重んじて、國家泰平でなければ、佛法弘通もならず、また、王法爲本の精神を、大切に心得よとの、御趣意からのお定めと存じます。斯様に、御文章では區々なれど、本山御影堂の御法談は、何時も、此の四科段の缺げたことはありませぬ。之れから思へば、此の四科段を分別することは、上は高祖大師、中興上人より、下は歷代善知識の御意にかなふ次第で有ります。依之東西を言はず、兩本山ともに、此四段の科を分けることを、宗式と遊ばされることである。今席に於てお話し申す、此御文の大意と云ふは、卽ち此四分科段に付いて、談ずる意味であります。時に、此四つは、何から見込んで、分けられたかと申せば、此御文全體の中に、「コノ」と云ふお言葉が、三ケ處ある、第壹に「コノウヘハ、サダメオカセラル第貳に「コノ御コトハリ」、第參に「コノ上ノ稱名」、

ル御オキテ」そこで、初め、モロ〳〵ノ雜行雜修自力ノコヽロヲフリステ、一心ニ阿彌陀如來我等ガ今度ノ一大事ノ後生、御タスケ候ヘトタノミ申シテ候、とあるが安心、タノム一念ノトキ、往生一定御タスケ治定トゾンジ、コノウヘノ稱名ハ御恩報謝トゾンジヨロコビマウシ候、とあるが報謝、コノ御コトハリ聽聞マウシワケサフラフコト、御開山聖人御出世ノ御恩、次第相承ノ善知識ノアサカラザル御勸化ノ御恩トアリガタクゾンジ候、とあるが師德、コノウヘハ、サダメオカセラル、御オキテ一期ヲカギリマモリマウスベク候、とあるが法度、斯樣に三つの「コノ」を、四段の分科の界目として御敎化下された御文と、お知らせ下されたのぢや。誠に中興上人の御敎化は、此領解文斗りでは無い、一字一句も無駄が無い、愚かな我等に判然と、一流の精神を汲ませ度いと、其御親切を感謝せねばならぬ。彼の名高い、聖人一流の御文章でも、能く注意して拜讀すれば、「ソノ」と云ふお言葉が、三ケ處ある。第壹に、「ソノユヱハ」、第貳に、「ソノクラヰヲ」、第參に、「ソノウヘノ稱名念佛ハ」、それ三つの「ソノ」が有りますぞ。其三つの「ソノ」も、第一の「ソノ」は、平生業成で、こゝろにつく。第二の「ソノ」は、正定不退で、體につく。第三の「ソノ」は、報謝の稱名で、口につく。實に水も漏らさぬ御親切、最初に、信心を以て本とせられ候と、信心爲本の看板を、お掛けなされて、夫れから、其信心を本とするわけを、平生業成にあるぞよ、こゝろに平生業成の覺悟が据れば、此の穢身のまゝ、不退の位がそなはり、口に稱ふる稱名は、心配かゝへた稱名で

は無い、心配とられて安堵した、嬉しさの稱名念佛ぢやと、殊に短かい御文の中に、三つの「ソノ」を以て、平生業成の御宗意を、容易く御知らせ下されましたぞ。是れは聖人一流章丈けの話「ソノ」と云ふお言葉が、三ケ處に巧みにお用ひなされて有る、と云ふことを述べた次第で有るが、今讃題の領解文は「ソノ」では無くて「コノ」とある。全體「ソノ」と「コノ」とは、どれほど違ふか「ソノ」とは手本「コノ」とは清書、手本とは五帖一部の御文章、一と云ふ字に假名までつけて、これ此の通りに領解なられたら、自分々々の自督の清書、述べ顯せよと仰せられても、愚かな私は述べかねるならんと、丁度親が子供に手本を與へ、此通り習字して、清書を立派に書いて見よ、と云ても、おさない子供なら、善く書き得まいと、

其清書まで、親が手を添へて……書かせる如く、中興上人、私の方に述べる領解まで、書いて與へて下されて、此通りに領解の清書が出來ましたと、述べ顯せよとは、何たる御慈悲な御遺文ぞと、深く喜ばねばならぬ事である。さて、「ソノ」とは、向ふのものを指す時の言葉、「コノ」とは、手許に有るものを、おさへて云ふ時の言葉。今此御文の三つの「コノ」は、何をおさへての「コノ」かと申せば、手前にある安心をおさへて、「コノ」ウヘノ稱名。「コノ」御コトワリ。「コノ」ウヘハ、サダメオカセラル、御オキテ。と云ふお意である。成る程、雜行すてゝ後生助けたまへと、たのむ一念の水際がたゝねば、「コノ」と云ふ言葉は出て來るものではない。雜行もすてたやらすてぬやら、たのまれたやら、たのまれぬやら、夫れでは第一、安

心の一科段で、「テ」の字が二ケ處口へ出されぬ。先づ、モロ〳〵の雜行雜修自力ノ心ヲフリステ、までは云はれやうが、フリステテと、後とのテの字が、はつきり云はれぬ。云はれぬ筈ぢや、フリステズに成つて居る。又た、一心ニ阿彌陀如來我等ガ今度ノ一大事ノ後生、御タスケ候へトタノミマウシテ。云はれても、タノミマウシテ候と、次のテの字が、はつきり云はれぬ。云はれぬ筈ぢや、タノミマシヤウカ、マシヨマイカ、今が思案の眞最中と、云ふ譯ぢや。これでは、無理に氣張りて、「コノ」と云ふても、コノ疑ひ、コノもやく〳〵、コノと氣張りて、おさへればおさへる程、碌なものは飛び出さぬ。此故に、きつぱりと、雜行雜修自力ノ心ヲフリステ、一心ニ阿彌陀如來我等ガ今度の一大事の後生、御タスケ候へトタノミマ

○さふらふ候と、云ひ切れる安心が定まらねば、コノウヘノ稱名とも、コノ御コトワリとも、コノウヘハ、サダメオカセラル、御オキテとも、出ては參りませぬ。安心さへはつきりして居れば、コノウヘノ稱名ハ、せめての御報謝、コノ御コトワリ聽聞マウシワケサフラフコト、立教開宗については、祖師の御恩、弘通については、大善知識の御恩、コノウヘハ、此一大事を解決させて貰ふたことは、皇室より我等に佛教を下された御恩、聞く身にして下された父祖の恩、露の命のあらん限りは、誠忠仁愛に精進せんと、稱名諸共勇むのも、コノ矢張り安心が根本である。して見れば、報謝の稱名勇むのも、コノ安心、祖師善知識の御恩を思はすのも、コノ一念、凡情を恥ぢて掟を守り、忍耐さすのも、コノ安心でありますぞ。さー皆さん、斯樣

に、三ケ處の、コノと云ふお言葉で、判然と四段に分科が出來ますが、初め安心の一段は、後との三段を貫ぬいて居ります。此點に注意していたゞきましやう。要するに淨土の眞宗は、安心報謝師德法度の、四本柱で建立された、他に比類なき一家にして、此一大理想の家の子と成り、愉快に活動する身に成るが、眞宗如實の御門徒ぞと、書きおき給へる御文なら、安心報謝師德法度、完全なる御門徒の一人となるが、此御文をいたゞく所詮、之れに過ぎたる喜びはなし。あまり長くなりますから、こゝろ殘りは次の席。

第七席

モロ〳〵ノ雜行雜修自力ノ心ヲフリステ、一心ニ阿彌陀如來、ワレラガ今度ノ一大事ノ後生御タスケ候ヘト、タノミ申シテ候。云々

引きつゞいて、お取次ぎに及ぶ、領解文につき、御文の大意を辯ずるに、安心報謝師德法度の、四段に分けて、其中でも、最も肝要たるは、安心の一段である、と申すことは、早や前席に於て、聽聞の通り、此席にては、更に其四段を、初めの三段を、眞諦門とし、終りの一段を、俗諦門として、明かし給ふ、御意を申述べます。そも〳〵我淨土眞宗眞俗二諦の法門は、『大無量壽經』を以て、宗の本旨とし給ひ、其の又た『大經』の中に於ては、源と第十八願の願文に依て立て給ふことは、かねて聽聞の通り、願文の三十六言中、設我得佛十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念若不生者不取正覺の、二十八言は眞諦門の安心であり、唯除五逆誹謗正法の八言は、俗諦門の訓誡

であります。釋迦如來此土にお出ましなされたは、全く此お謂れを我等に知らせん爲めの御苦勞である。幸ひ今年は、釋迦如來御出現より、二千五百年を迎へて、各方面に、其記念事業を起こさるゝ次第なれば、釋迦如來のことを、少しお話し致しませう。全體、大聖釋迦牟尼世尊は、此娑婆に出て來た用事は、外に用事が有るではない、三界を矜哀し、如來世に興出して道教を光闡したまへる所以は、群萌を拯ひ、惠むに眞實之利を以てせんと欲してなり、彌陀本願の眞實利益を、與へん爲めに出て來たぞよと、御說きなされてある。此御意を我御開山、正信偈に、如來所以興出世、唯說彌陀本願海、五濁惡時群生海、應信如來如實言、と御讃嘆成されて御座る。夫れなら、初めから、彌陀の本願を御說きなされて、自力聖道八萬の法

門は、御說きなさらずとも、よさそうなもの、澤山なお經を、御說きなされたばかりで、末世の我等は、大きに迷ひますがな、と曰はれるだらうが、さー、夫れは、時機至らざる爲めの方便である。之れに依つて、『大無量壽經』を御說きなされた時は、日頃の釋迦如來では無かつた、既に『大經和讃』に、尊者阿難座よりたち、世尊の威光を瞻仰し、生希有心とおどろかし、未曾見とぞあやしみし、高座における上りなされた御相好、明淨なる鏡のかげ、うらおもてに透るが如く、あだかも鏡と鏡とを、照し合せたやうな御すがた、そこで、八萬の大衆も呆きれはて、中にも、三十三年の間、御傍去らずの阿難尊者、驚き入りて飛び出し、高座の前にためつすかしつ、世尊の威光を瞻仰すと、氣高き御相好に拜み入り、未だかつて殊勝なること、今の

如くなるを瞻覩せず、今日はいかなることで御座ります、三十三年の長い年月、御傍去らずの私も、こんな御相好は、今まで拜んだことは御座りませぬと、申上げたら、大聖釋尊、よくこそ問ふた、阿難甚だこゝろよし、然れば今汝に語りて聞かさう、釋迦が此世に出て來た用事は、彌陀の本願を說かんが爲め、さりながら、時節が來ねば仕方なく、月待つまでの手ずさみに、八萬四千の法を說くは、對機說法應病與藥、機に應じて法を說き、病に對して藥を與へ、酒好きには酒、菓子好きには菓子、其あいてに應じて、與へる御法が八萬四千、然るに、今日漸くにして、釋迦が此世に出て來た本懷を說いて顯はす時節の來たは、三千年に一度咲く、優曇華に逢ふよりまだ難し、其殊勝なる時を得たり、無量億劫にも、値ひ難く見難く、猶ニ靈瑞華時々乃出一、さーこれからぢや、出世本懷眞實の法を說くぞよと、夫れから御說きなされたが、卽ち淨土の『大無量壽經』、爰を和讃に、如來興世の本意には、本願眞實ひらきてぞ、難値難見とときたまひ、猶靈瑞華としめしける、と御讃嘆なされた。時に、此出世本懷と云ふに付いて『大經』には、三つの證據が出て居ります。先づ初めに八相示現、其次ぎには五德瑞現、其次ぎには惠以眞實之利、此中あとの二つは、皆さんには、少しおわかりにくい故、初めの八相示現に付いて、さらりとお話し致します。其の八相とは、降天、入胎、出胎、出家、成道、降魔、轉法輪、入涅槃、是を八相示現と言ふ。降天とは、經に捨彼天宮降神母胎と、說きたまひて、兜率天より天ま下りてたまひしを、母公の胎內に降し給ひたこと。入胎と

は、母公の胎内に、一ケ年御逗留のこと。出胎とは、四月八日の花のころ、母公が、お庭前の、無憂樹の華盛りに開け、葉も亦た綠なるを、右の手を擧げて、花を手折らんとし給ふたら、俄かに誕生なされたが出胎、其時四天王卽ち天の繒を以て接して寶几の上に置き奉る、帝釋は寶蓋を擎げ、梵王は白拂を執て左右に侍立す、難陀跋難陀の兄弟は一人は、淸淨なる水を、一人は温かな湯を献じ、御身を灌ぎ奉る、音樂の聲はなりわたり、華を降して御供養申上げた。是を記念したのが、昔から卯月八日の甘茶と云ふて、誕生佛のお像に、甘露の水を灌ぎかけ、家根を、蓮華草やたんぽゝの花、菜種の花で葺くことが、今日では四月八日の花まつりで有ります。次に、出家とは、經に、「見二老病死一悟二世非常一、棄二國財位一入レ山學レ道、服乘白馬寶冠瓔珞遣レ之令レ還捨二珍妙衣一、而著二法服一剃二餘鬚髮一」と說き、世の無常を觀じて、國も財も位も捨て、檀特山に御登りなされたが出家、夫より苦行難行六年にして、得道し給ひたが成道。いよ〳〵證りを開き給ひ、山よりお出ましなされたが、出山の釋迦と云ふ。其時、「靈禽翼從往二詣道場一、吉祥感徵表二章功祚一、哀受施草敷二佛樹下一跏趺而坐」とあれば、孔雀鳳凰鸚鵡舍利、獅子や猿が草を持つて來たり、華を集めて高座を拵へた。佛は此上に端座まし〳〵て、暫く定に入り給へば、魔王官屬を率て來りて逼り試むと、釋迦牟尼世尊に打てかゝる。其時、佛は智力を以て皆な降伏せしめむと、立つて大地を蹈まへ、はつたとにらみ給へば、六種震動と大地はうなり、魔王の住家も碎くるばかり、魔王の體はたちすくみ、進むことも退

くこともかなはず、其時魔王あやまりはてゝ、佛道修行する人には、決して障りは致しませぬ、必ず是を守りましようと、誓ひをたてゝ、あやまりはてたを、降魔と云ふ。轉法輪とは、三百餘會の法輪を轉じて、八萬四千の法を說き給ひたが轉法輪。八十歲にして、涅槃の雲にかくれ給ひ、淨土へ御かへりなさるゝが入涅槃。是を八相示現と言ふ。此お謂を『大經』の上に御說きなされてある。是れからうかゞつて見れば、初め『華嚴經』より、數多のお經をお說きなされたは、皆なこれ一代化前序と言ふて、彌陀の本願を說かんが爲めの、前口上と言ふことに相成ります。すべて、世間でも、何か重大なる用件を帶びて、他家へ相談に往くにも、玄關へ這入るなり、直ぐには言ひ出されぬ、先づ第一に先方の氣分を考へ、其機會を捉へて、話を

切り出さねばならぬ。長々御無沙汰して居る先きなら、先方の主人の趣味に合ふ物品とか、或は、奥さんの御用にたつ品とか、お子さんがあれば、お菓子とか、夫れ相當の土產を持參して、機嫌よく受けて下さるか、「いやこれは久しぶりだ、よくこそおいで下された、いやー、それはそんな土產物など持つて來なさらいでも、お心安い仲だ、之れは夫れ〳〵御叮重なお土產、遠慮なく頂きます。時に久しぶりだが、此頃何をなすつて居られるか」と主人の歡待に打ちくつろぎ、四方山の話しから、先方も打ちとけて下された時、機會は良しと、膝に手を置き、扨實は今日參りましたは、外で御座りませぬ。箇樣々々の次第で御願ひに出ましたが、何卒宜布く御依賴申上げますと、其時の相好は人間でも緊張して居るから、普通の時とは

ちがひますぞ。皆さんおわかりになりましたか、大聖釋迦牟尼世尊、初め『華嚴經』をお說きなされたは、菩薩方への機嫌取り、阿含をお說きなされたは、羅漢達への機嫌とり、『法華經』お說きなされたは、三乘衆への機嫌とり、彼方此方の顏色見て、機會も好しと『大無量壽經』、今こそ出世の本懷を、說いて顯す時節ぞと、膝に手を置き、さて此釋迦が、兜率天から天下り、母の胎內へ神を宿し、十二月を經て生れ出で、家も位も振りすてゝ、山に登りて道を求め、遂ひに三十にしてさとりを開き、惡魔外道を降伏して、八萬四千の法を說き、八十歲の夕べには、涅槃の雲に隱れるが、特に此世に出て來た用事は、彌陀の本願眞實之利と、かたちをあらため、威儀を正して、五德の相を現し給ひ、八相の化儀を來會の聖衆に讓り、光明

放つて御說きなされたが此、『大無量壽經』、無量劫にも値ひ難ひ、見難ひ、得難ひ時節は今ぢやと、あらたまりての御挨拶、是れを卽ち如來出世の本懷とも、亦たは出世の本意とも仰せられる、此出世の本意たる、弘願眞宗の彌陀の本願こそ、凡夫が轉じて佛となり、惡人も轉じて善人となる、眞俗二諦の法門なるが故に、三代目の覺如樣も、凡そ他力の一門は、釋迦一代の說敎に、未だ其例もなき、通途の性相を離れたる、言語道斷の不思議といふは、凡夫が佛になるが故なりと仰せられた。餘り長くなりますから、心殘りは次席に。

第八席

モロ〳〵ノ雜行雜修自力ノ心ヲフリステ、一心ニ阿彌陀如來、ワレラガ今度ノ一

大事ノ後生御タスケ候ヘトタノミ申シテ　候。云々

引きつゞいて、讃題の御文は、全く眞俗二諦の、御意を明かし給ふ、と申すことを、お取次申します。元來、此の眞俗二諦とは、眞俗相資とも二諦相依とも、仰せられることにして、所謂、二にして不二の、おいはれが有つて、二諦相依で、はじめて、眞宗行者の全體を成す。『禮記』に、「禮ヲ知ラザル者ハ人ト成サヾルナリ」、と有て人ト成サヾルナリとは、片輪者と云ふこと。また『涅槃經』には「世間ニ惡ヲ爲ル者ヲ名ツケテ半人ト爲ス、」と說き給ひ、半人とは一人まへの人間で無いと云ふこと。今、我淨土眞宗に於ても、眞諦門俗諦門の中、其一門が缺げて居たら、眞宗行者と成さゞるなり、夫れは卽ち半人なり、片輪者で有る。また、たとひ眞諦に入りても、極樂は樂しと聞いて、己が勝手な慾望を、滿足し度いの意から、利己一邊の主義を以て、往生淨土を願ひ、惡人正機を心得誤りて、御報謝の營みもなく、俗諦の行爲もつゝしまぬは、決して眞宗ではありませぬ。夫れは姪祠邪教に劣る、國家の蠹賊と言はねばならぬ。亦王法仁義は守りても、眞諦門の信心の無い者は、之も眞宗の人ではありませぬ。何故なれば、それは、一般世間の道德にして、そんなことなら、神道でも、儒教でも、人倫五常は皆な說いて居る。何の妙味も無いのに、故らに、我眞宗に於て、俗諦門をたて給ふ道理が無い。皆さん、此點は、理屈では無い、實際問題として、よーく味ふて下されや、名號聞持の一念に、內に他力信心を獲得するほか、出かける後生の一大事には、我等が方からは、何一つとして、差し

出す必要もなく、差し出すものも無し、願も要らず行もいらず、信心相續して麗しく、此の人生を進むより、他に佛法行と申すものはありませぬぞ。此故に、此信心に照されて、稱名諸共精進に、忠孝仁義の大事より、喫茶喫飯の微事に至るまで、世間一切のことが、皆之れ、佛法の御用と心得るからであります。爰を中興上人は、「タトヒ、アキナヒストモ、佛法ノ御用トコ、ロウベシ」とも、「人ハ總體世間氣ワロシ、ナニゴトモ佛法ノ上ヨリハタラクベシ」とも、「佛法ニハマイラセ心ワロシ、コレヲシテ御心ニ叶ハント思フ心ナリ、佛法ノウヘハ、何事モ報謝ト存スベキナリ、」と明に御教化下されましたぞ。此の御教化からいたゞけば、信心相續の行者にあつては、治世産業皆悉、佛法の御用であり、御報謝の行でありますぞ。全體

我眞俗二諦の法門は、『大無量壽經』を以て、宗の本旨とし給ひ、其又『大無量壽經』の中に於ては、源と第十八の願文に依つて、立て給ふと云ふことは、前席に於て、一寸辨じましたが、願文三十六言の中、前の二十八言は眞諦門、後の八言は俗諦門、其眞諦門とは、卽ち、悲智圓滿の阿彌陀如來、吾等凡夫の爲に、起し給へる本願を深信し、現世の命終り次第には、無始已來の惑業をはなれて、彼の極樂淨土に往生し、無上涅槃の證りに至る、此の大きなる仕合せを、常に歡喜愛樂して、報恩謝德の思ひより、稱名念佛すること。次に、俗諦門とは其如來の大悲を歡喜愛樂しつゝ、其生を受けし國に在りては、國家の法律制度を遵守し、人倫五常の道德を守り、以て力を國利民福に竭し、麗しく一生をおくること。此の意を中興上人、安くお知

らせ下されたが、今讃題の領解文、モロ〳〵ノ雜行雜修自力ノ心ヲフリステ、一心ニ阿彌陀如來、ワレラガ今度ノ一大事ノ後生御タスケ候ヘトタノミ申シテ候、タノム一念ノトキ往生一定御タスケ治定トゾンジ、此ノ上ノ稱名ハ御恩報謝トゾンジ喜ビ申シ候、と仰せられたは眞諦門。コノウヘハ定メオカセラル、御掟一期ヲカギリ守リ申スベク候、と仰せられたが俗諦門。夫では一寸お尋ね申しますが、御當流は、惡人正機の本願に、助けらるゝと、お聞かせにあづかりますが、眞諦門の安心丈けでは、事足らず、俗諦門の仁義五常まで、必要で御座いますか、夫では、惡人正機の宗旨とは、言はれぬではないか。さあ、其點です、萬一我眞宗が、そんな氣儘な宗旨なら、實に國賊遊民を出す、邪見邪道の團體にして、一日も社會に

存在を、許すべからざるものと、申さねばならぬ。すでに、祖師聖人は何と仰せられましたか、「朝家ノ御タメ、國民ノタメニ、念佛マフシアハセタマヒサフラハヾ、メデタフサフラウベシ」、亦御本書には、傳教大師の、『末法燈明記』を、御引用なされて、「仁王法王互ニ顯ハレテ、而シテ物ヲ開ク、眞諦俗諦遞ニ因リテ、教ヲ弘ム」、と御訓誡なされて御座る。又『六要鈔主』、は此の御文を御釋なされて、「是佛法王法治化ノ理ヲ演べ、乃チ眞諦俗諦相依ノ義ヲ明ス」、と御敎化あらせられた。して見りや、鳥の兩翼、車の兩輪の如く、二諦そらふてこそ、眞俗相依の眞宗であります。最も之れは、御開山の私にあらず、源『大無量壽經』に於て、此經を聞いて、如來の大悲を感受し、信心獲得の上は、努めて世間の倫理道德を、實踐躬行せよと、勸め

給ひたが、五惡段の說相であります。此の五惡段は、第十八願終りの八言、唯除五逆誹謗正法、此御文を開說し給ふ。そこで此正法とは、出世間の法は勿論、世間門の仁義五常も、此正法にこもりて居ります。其證據は、『論註』に、此の誹謗正法に付いて、問答をまふけ、其末文に、「若シ諸佛菩薩、世間出世間ノ善道ヲ說イテ、衆生ヲ敎化スル者無サズバ豈ニ仁義禮智信有ルコトヲ知ラム耶」、と仰せられてあります。依之仁義五常も佛法卽ち正法である。時に、五惡段では、仁義五常の五善を勸めて、不仁不義等の五惡を、誡め給ふことは、日頃聽聞の通り、其五善を勸め給ふ經文には、一々「人能ク中ニ於テ一心ニ意ヲ制シ、身ヲ端シ行ヲ正シ、獨リ諸善ヲ作シ、衆惡ヲ爲サヾレバ、身獨リ度脫シテ、其福德、度世、上天、泥洹ノ道ヲ獲」、

とお說き成されてある。依之、高祖大師も、「金剛ノ眞心ヲ獲得スル者ハ、橫ニ五趣八難ノ道ヲ超へ、必ズ現生ニ十種ノ益ヲ得」、と御敎化遊ばされた。おそれながら、竊に高祖大師の、此御敎化を、今の『大經』の御文に、一往配當していたゞけば、經に、一心とあるは、御當流では、金剛の眞心、また、身獨度脫してとは、橫さまに五趣八難の道を超ゆること、其福德を獲るとは、正しく現生十種の益、泥洹の道とは、必至滅度であります。さあ皆さん、如斯、滿天下の人、皆此の、眞宗念佛の行者とならば、悉く至德を具足し、轉惡成善の修身となり、心多歡喜の家庭と爲り、知恩報德の國家忠孝とならば、天下和順、國豐民安の得益疑ひ無し、實に佛法は鎭護國家の利益あり、夫れ故にこそ、古へ、皇室より之を弘通し給ふ。然るに何ぞや

あやまりて、眞諦出世の安心さゑあれば、俗諦世間の報謝道德も、何ぞ其必要あらんやと、誤解する人が有るとすれば、全く高祖大師の御精神を汲まぬ、異解者の徒輩と謂はねばならぬ。現今滔々として、我佛教を無用視し、反宗教の聲あるは、そんな心得違ひの人が有るから、產まれて來た產物でありますぞ。爰を中興上人は「サラニモテコレハ他人ワロキニハアラズ、自流ノ人ワロキニヨルナリ」、と仰せられた。誠に此大教誡は、御門徒は勿論、今日の眞宗僧侶が特に深く反省すべき一大金言と存じます。こゝろ殘りは、後席に於て。

第九席

モロ〳〵ノ雜行雜修自力ノ心ヲフリステ、一心ニ阿彌陀如來、ワレラガ今度ノ一大事ノ後生御タスケ候ヘトタノミ申シテ候。云々

叉手、前々席より、おとりつぎに及びます、眞俗二諦のお謂れ、前席に於て、『大經』の五惡段と、現生十種の益に付いて、辯じかけましたが、委くは又其中に辯ずることゝして、今さしあたつて、現生十種の益の中に、轉惡成善の益は、俗諦行狀の本と爲つて、他の九益を具することゝなり、轉惡成善なるが故に、至德も具足し、諸佛も之を護念し給ふ。又、眞諦安心の上から申せば、十種の益ある中、心光常護の益が本となりて、他の九益を具することゝなる。卽ち『文類』に、「信ヲ發シテ稱名スレバ光ニ攝護シ給フ、亦現生ニ無量ノ德ヲ獲セシム」と仰せられた。又御和讃には、「金剛堅固ノ信心ノ、サダ

マルトキヲマチエテゾ、彌陀ノ心光攝護シテ、ナガク生死ヲヘダテケル」とも仰せられた、之を中興上人は、「信心開發ノ一念ニ、此光明ノ中ニ攝取セラレ、一期ノ間ハ、此光明ノ中ニスム身ナリト思フベシ」とも御教化下された。觸光柔輭の願功により、無量無邊の得益は、自ら現在に顯はるゝ。あの、瓜や茄子を、半ケ年も一ケ年も、臺所にころばして置いたら、半ケ年はおろか、一ケ月たゝぬ間に、腐敗して仕舞ふが、これを鹽して、味噌か酒の粕に、漬けて置けば一ケ年はおろか、二年でも、三年でも、腐敗せぬばかりか、あまつさゑ、味噌なり酒粕なりの風味が、自然に瓜や茄子に、しみこむ如く、十二光の妙味が、自然に行者の心身にしみこみ、知らず識らず、あきらかなるさしがねに從ひ、妙好人の境界となる、爰を御和讃に、

「光明テラシテタヘザレバ、不斷光佛トナヅケタリ、聞光力ノユヘナレバ、心不斷ニテ往生ス」と述べ給ふ。腐敗やすきは瓜茄子なれど、味噌や酒粕の力で腐敗ぬ如く、我等凡夫は淺間布き奴なれども、此心臨終まで通りて往生するは、全く不斷光の力であると仰せられますぞ。そこで此聞光力によりて、貪慾の剛情も、清淨光にたしなめられ、瞋恚の焔は、歡喜光に打ち消され、御恩知らずの此奴が、知恩報德の思ひ起すも、全く智慧光の御はたらき、「信心ノ智慧ニイリテコソ、佛恩報ズル身トハナレ」此佛恩報ずる身となれば、自から國恩を報ずる身の上となり、上皇室を尊敬し奉り、國家の法律は堅く遵守し、國稅縣稅地方稅、其他物品稅營業稅所得稅、進んで遲滯なく上納し、又國民相互の交際も、五倫五常を守り、人の人たる

道をふみ、言論行動共に注意し、一旦緩急あれば義勇奉公の活動にうつる、此上ハ定メオカセラル御掟一期ヲカギリ守リ申スベク候と、知恩報德の益、智慧光の顯はれより、必らず決心が出來ますぞ。時に、斯く申しますれば、世の中には、夫れは仲々六ケ布ひ、俗諦行狀の善惡によつて、往生の得不得を論ずれば、恐らく吾々は、往生成佛は出來ませぬ、と云ふ人も出來やうが。皆さん、爰はよく聽聞して下されや。全體、眞諦門の安心は一味であるが、俗諦門の報謝行狀は、一味平等には參りませぬ。顏やかたちの異なるが如く、一人々々各別である、是は御互に宿世の因緣がお耻かしい。之れに依つて、たとひ信心の得られた人でも、其人が直ぐに、御開山聖人や、中興上人の通りには、決して成られるものではありませぬ。例へば現代に於ても、同じ眞宗信者として、或は博士、或は將官、或はまた一代の富豪立派な御報謝も出來、國家社會の爲には、花々布き貢獻成さる方がある、と云ふて、博士でも無く、將官でも無く、富豪でも無い、ばかせの餓鬼大將の貧乏な私が、其方々と、同じ御報謝同じ貢獻、致し度いとは思ふても、雲にかけ橋霞に千鳥、思ひも戀も絕へ果てたこと。今日高楠博士や谷本博士、其他學者にして、眞宗信者も澤山居られるが、眞諦門の安心は、愚な吾等と異ることなし、皆一味の安心である。然し、あんな先生方が、我が佛敎の爲め、亦我が帝國の爲、進んでは世界人類の爲め、幾多の貢獻なされることは、實に廣大無邊である。亦、軍部の將官として、近くは、日支事變當時の陸軍參謀總長であつた、金谷範三大將閣下や、其當時の

參謀次長眞崎甚三郎大將閣下や、其他軍人の方々で、眞宗信者も澤山居られるが、眞諦門の安心は、更に異るべからず、唯一味なり、然し、俗諦世間の活動は、あの方々と、同樣には參りませぬ。すでに皆さん御承知の如く、明治二十七八年、日淸戰爭當時、明如上人、熊本第六師團へ、御親教なされ、出征軍人の歸敬式、軍人名號を手づから御下附、其時の御歌に、「後の世は彌陀の誓ひにまかせつゝ、いのちを安く君にさゝげよ」其當時、金谷大將は、尉官として、六師團附の將校であつたが、此上人の御親教や、御歌のありがたさに、感激せられ、金谷大將御自分の領解を、「ありがたや彌陀のおほせをかしこみて、我が大君にいのちさゝげん」と明如上人へ差し出された。其時上人、深く御慶びあらせられ、「金谷さん、あなたは、此お

覺悟を以て、おはたらき下さい、わたくしも、同じ覺悟の下に、皇國の御爲に、はたらきます」、と仰せられたとある。さあ皆さん、眞諦出世の安心は、明如上人も、金谷大將も、更に異るべからず、唯一味である。然し、俗諦世間の勤務は、本願寺の御住職と、軍部の金谷大將とは、大きに格別であります。又、本願寺の御門徒にして、隨分富豪の方も有りますが、如何に一代の富豪でも、眞諦門の安心は、黃金づくでは定りませぬ、矢張り一味のお他力である。然し、俗諦報謝の行狀は、富豪と貧乏とは、同列には參りませぬ。すでに、私の知る御同行に、大阪の由井卯三郎と云ふ方がある。此方は、誠にお仕合はせな方で、隨分苦心も成されたであらうが、一代の成功家で有るが、眞宗の信仰に入られてより、嗚呼、言語同斷の

御不思議に、會はせていたゞきました、之こそ人間としての、何よりの儲けごとだ、滿天下の同胞、悉く親鸞聖人の一流を汲み、念佛相續する身と成れば、之に過ぎたる幸福は無い、何卒して、一人でも御緣を結び度いと、天王寺の境内を借りて、單獨で、親鸞聖人の銅像を建て、多額の費用を投ぜられたことであるが、何萬圓か何千圓か、其經費は、誰にも口外されませぬ。此爲には、嘗て別院へも顏出しせぬ人が、兩度の彼岸や、其他の場合、天王寺に遊んで、知らず識らず、お禮する。從つてお題目は唱へぬ、南無阿彌陀佛と、稱名念佛して、聞法信喜の御緣の出來る人が、幾百萬とも幾千萬とも、數限りも無き次第で有ります。亦、大阪城の石山本願寺跡に、蓮如上人の袈裟掛松と言ふが、近年までありましたが、先年遂に老

木の樹齡盡きて、枯て仕舞ひ、今に根株丈は、保存して有るが、之も末は朽ち果てる故、如何にも勿體なく、また殘念と云ふ由井氏の考へから、記念する爲に、名號石を建立致された。何分只今では、大阪師團の敷地にして、陸軍省の所有地なれば、師團長の諒解を得、其筋の許可を得て、いよ〳〵除幕式までには、多大の費用に相違ないが、爾來毎月蓮如上人の御命日には、其名號石の前に於て、五百人或は千人の參詣人が、正信偈御和讃のお勤めして、勝如上人御染筆の、大阪建立の御文章をいたゞき、本願寺布教使の說教一席、說く人も聞く者も、感慨無量、四百數十年の古へ、此地に石山本願寺を建立し給ひ、中興上人最後の御染筆、此御文章を讀み聞かせ給ひ、吾等の先輩が、直々の御敎化にあづかりたのだが、昭和の聖代、由

井氏の御蔭で、今此御緣にあづかるかと、私も先年出張して、多數の御同行と、喜び合ひました。而して、其說教が濟むと、由井さん御夫婦と、御相續人、之は法學士であるが、其御夫婦とが、出口に起立して、參詣多數の同行に、一々の御挨拶、「皆さん、ようこそ御參詣下さいました、來月も何卒御參詣下さい、是は些少ですが、お宅に於て、お茶でも召あがつて下さい」と、結構なお菓子の御供養が出る、毎月〳〵五百人有つても、千人有つても、此きどくな御接待、涙なくしては歸れませぬ、ところが、御同行の噂に、かねては營門に衞兵が起つて居て、一般の出入りが出來ぬのに、其日丈けは、珠數さえ持つて居れば、這入られるから、隣家で珠數借りて、參りた人が、初めて聞いて驚きをたて、別院へ參るやうに成つた人が、だ

いぶ有ります。矢張り中興上人の御遺德と、由井さんの、自信教人信の念力でしやうとの言葉、尙ほ一萬圓のお金をなげ出し永代崇敬の基本と致されました。皆さん何と云ふ、尊い御奉仕でしやう、夫れのみならず、毎月貧民に白米の施し、また、昭和十年一月以來、山科に、蓮如上人の銅像建立に着手し、すでに立派に建て御座る。さあ皆さん、博士で念佛する人も、軍人で信仰ある方も、富豪で信心の行人も、無學無能の無產者でも、眞諦出世の安心は、他力廻向の信心なら、更に異るべからず、皆一味で有りますぞ。俗諦報謝の行狀は、私が、金谷大將や、高楠博士や、由井卯三郎さんや、眞崎大將の通り、何か一事丈けでも、實行し度いと氣張りても、其眞似は出來ませぬぞ、と云ふて、私は學問もなし、能もなし、お金子も

無いから、御報謝も、王法仁義も、何も出來ませぬと、横着我儘利己一邊の、生活しても、構はぬだらうか、夫れでは皆さん相濟みませぬぞ。私は私の生命のあらん限り、聲のつゞく限り、注意の出來る限り、報恩慚愧誠忠仁愛、私で出來る丈けの勤めは、懸命に務めずには居られませぬ。寺、教會や佛前へ出た時ばかりの佛法にあらず、世間の交り夫婦の仲、父子兄弟朋友も、隨分大切に睦じく、わづかなことに仲違い、角振り立てる恥しさ、我身は惡き徒者、凡夫の自性やめよぢや無いが、ならぬ堪忍するのが堪忍、お恥かしやと胸なでおろし、過去を耻ては未來をよろこび、現世は萬般つゝましく、進んで皇國の良民となるが、眞俗相依の行者として、之に過ぎたる仕合せはなし。あゝうるさい娑婆ぢや、地震ぢや、雷ぢや、戰爭ぢや、非常時ぢや、不景氣ぢや、大風ぢや洪水ぢや、いやもう此娑婆には飽きました、浮き世を捨て後生一方、此世のことは、どちらでもよい、私は信心獲得して、極樂參りさえすればよい、と云ふ了簡では、眞俗二諦は立ちませぬぞ。依之中興上人は、我は信心を得たりと云ふて、疎略の義なく、いよ〳〵公事を全くすべし、と御教化あらせられた。

第十席

モロ〳〵ノ雜行雜修自力ノ心ヲフリステ、一心ニ阿彌陀如來、ワレラガ今度ノ一大事ノ後生御タスケ候ヘトタノミ申シテ候。云々〳〵

又手、引き續いて、お取次に及ぶ、讃題の領解文、其大意に付い

て、安心、報謝、師德、法度、四つの段科を擧げ、前の三段は、眞諦門、後の一段は、俗諦門、此眞俗相依り、安心報謝師德法度、具さに揃ふた領解こそ、見眞大師の御門徒ぢやと、御敎化下さる、中興上人のおかたみであると申すことは、前席までにお話が濟みまして、此お座では、安心報謝師德法度、四つあれども、唯だ二つ、前の三つ、眞諦卽ち佛法なり、後の一つ、俗諦卽ち王法なり、此故に我が眞宗は、王法、佛法の二つより、ほかに別義があるでは無い、と御聞かせ下さる、覺如上人の御敎化を申述べて、後に、存覺樣の御意見を、少し述べます故、大切に聽聞して下さいよ。先づ、覺如上人の御敎化から、うかゞへば、此佛法王法の二つより外はない、と仰る。卽ち、車も片輪では廻らぬ、鳥も片羽では飛ばれぬ、兩輪

兩翼互に是を助け合ふ、佛法を以て王法を莊嚴し、王法を以て佛法を助成し給ふ。然れば、佛法王法は牛角の如し、安心と云ふも、報謝と云ふも、師德と云ふも、唯だ一佛法と云ふことを知れ、後の法度は、王法と知れ、而して佛法は內心に、王法は外相に、と御示し下されましたぞ。時に、二つあるものでも、仲が好くて良いことゝ仲が惡くて良いことゝがある。內外相應と云ふ時は、內心と外相とが、仲が良い。卽ち、高祖大師の、我れは加古の敎信沙彌の定なり、と仰せらる時の御思召。然し、敎信沙彌の容に日雇かせぎや、渡し守して居ては、一宗開闢は覺束無い。是に依りて高祖大師は、一切經校合の時は、日本全國の智者學者を人選する、其中鎌倉執權より我高祖大師を選び出し、是非にと命ずるまゝに應じ給ひ、智者學者

のお仲間にお這入りなされた。此時は、內心と外相とが仲が悪い。さりながら、其御實意をうかゞへば、必ず內心と外相とが、仲が悪いと思ふて吳れな、時機に相應せねば、一宗開闢の本意が遂げられぬ。之れに依つて此の親鸞は、愚僧ながら學者ぶるぞよ、小慈小悲もなけれども、名利に人師を好むなり、內心愛慾の廣海に溺れながら、外相は、止むを得ず、佛法の學者ぶるぞよ、と云ふ御思召であります。丁度、あん餅を、ひつくりかへせば、式台餅に成るが如く、あんが外か、內かのちがい丈け、高祖大師は、據ろなく、あんを、內へお包みなされたのぢや。今覺如上人は、其、あんを外へ出して、外相には王法を專らとし、內心には佛法をたくはえよ、との給ふ。飛び立つ程に嬉しうても、ありがたぶらず、信者ぶらず、西

瓜の容になれよ、と仰る、內心は、ありがたうて眞赤でも、夫れは外へはあらはさず青い顏して王法の世渡り、「叩ひてや中を知り度い西瓜かな」、青皮見つめて、このもしう思ふのは、中の赤きを推量する故。爰を中興上人は、たふとむ人よりも、とふとがる人が、たふと、いとも、口にもいだし、色にも其すがたは見ゆるなり、と仰せられた。世俗の謠にも、聲をかぎりに啼く蟬よりも、啼かぬ螢は身をこがす、言ふがまことか言はぬが實か、蟬と螢の情くらべ、必ず蟬坊主蟬同行には成るな、螢坊主螢同行は、蟬よりもはるかに、見込みが有るぞよ、と云ふことを、內心佛法外相王法と、御敎化成された。先きの敎育總監陸軍大將眞崎甚三郎閣下、かつて、陸軍中將の時代、昭和二年八月、弘前第八師團長に親補せられ、其任地へ往

かれる時、十七歳に成られた愛嬢が、重き病氣の床に就いて居られたので、家族は東京に殘して、單身任地に赴かれた。人一倍子煩惱の將軍は、お嬢さんの病が氣がゝりであつた、しかし、あとは賢夫人が殘つて、看護成さることにして、「嬢よ、氣分はどうぢやな、父さんはの、今度弘前へ行くんぢやが、お前は、癒くなるまで待つのぢやな、父さんは弘前から、お前の全快を一心に祈つとるぞ」、と、口にこそ出さね、愛嬢の痩せ衰へた頰、落窪んだ瞳、流石剛毅の將軍の眼も、暗い影で曇つて見へた。それから二ケ月の後、弘前第八師團長官舍の深夜、稱名諸共、靜かに御文章を寫し書く人、それは將軍其人であつた。東京に殘した愛嬢へ送る爲めのものであつた。

「それ八萬の法藏をしるといふとも、後世をしらざる人を愚者とす、たとひ、一文不知の尼入道なりといふとも、後世をしるを智者とすといへり。しかれば當流のこゝろは、あながちにもろ〳〵の聖教をよみ、ものをしりたりといふとも、一念の信心の、いはれをしらざる人は、いたづら事なりとしるべし。されば聖人の御ことばにも、一切の男女たらん身は、彌陀の本願を信ぜずしては、ふつとたすかるといふ事あるべからずと、おほせられたり、このゆへに、いかなる女人なりといふとも、もろ〳〵の雜行をすてゝ、一念に彌陀如來、今度の後生たすけたまへと、ふかくたのみ申さん人は、十人も百人もみなともに、彌陀の報土に往生すべき事、さら〳〵うたがひあるべからざるものなり。あなかしこ〳〵」。此御文章を送られるのであつた。そして、それが殆ど毎日の如く續いた。將軍の此手紙は、涙

に滿ちた而も自信教人信の、父として子を思ふ、未來永劫までの實意であつた。病床で、この手紙を受取る愛嬢は、涙ながらに、「お父さまありがたう、此世ばかりか未來まで、教へて下さるお父さま、私は何と云ふ仕合せ者でしやう」と、僅か十七歳の、花なら蕾の若人が、生死岸頭にたつて、未來の大自在力を喜ぶ、安心立命の人と成られました、と云ふこと。其後、令嬢危篤の電報を受取られたのは大演習の最中であつた。其時將軍は唯だ一語、「あれが男ぢやつたらなあ、戰地で死んでくれるんぢやつたらなあ」言ひつゝ、將軍の眼からは熱い熱が一雫、ほろりと軍服にこぼれ落ちた。丁度其の時、東京の留守宅では、令嬢が息を引取かけて居た。令嬢は、お母さまに、手を握らし乍ら、につこり笑つて、「お父様へ、有難う御座ゐました、おかげで私は安心して、御佛さまに抱かれて、お祖父さまお祖母さまのそばへ行つて、皆さまを待つて居ります、と仰言つて下さいネ、ナムアミダ佛〳〵」、聲諸共に、美しい令嬢の瞼は靜かに閉ぢられた。安らかに極樂無爲涅槃の彌陀のお淨土へ、皆さん何と云ふ尊い事實でしやう。お互に平素お寺に參詣して、佛法者らしくはして居ても、仲々我子の臨終に、佛法の話は出來ないものでありますぞ。然るに身は軍籍にありながら、全く王法爲本不惜身命の將軍が、我子の臨終に佛法を說き、令嬢もまた之を信じて、安心決得されるとは何たる幸福なことであらう。世の中に、こんな美しい仕合せな話が、又とあらうか。此御家庭こそ、內心佛法外相王法の龜鑑、之れこそ、眞俗二諦の見眞大師の御門徒と申上げねばなりませぬ。

さあ皆さん、今日の我々眞宗門徒は、斯かる信仰を内心にたくはへ、其燃へるが如き信仰の力は、全てを王法に献げると云ふ、將軍になりはねばなりませぬぞ。軍人政治家農業商業、教育家も工業家も、此覺悟に基きて、世界孤立の未曾有の國難、國家を擧げて直面すれば、禍變じて幸ひとなり、上皇室の御意を安め奉り、下同胞も笑つて暮す、其曉決して遠からず、急ぎて内心に信心をたくはへ、王法爲本の實行につくが、此法筵にあひたる所詮、之れに過ぎたる喜びはなし、餘り長くなります故、一寸休んで後一席。

第十一席

モロ〳〵ノ雜行雜修自力ノ心ヲフリステ、一心ニ阿彌陀如來、ワレラガ今度ノ一大事ノ後生、御タスケ候ヘトタノミ申シテ候。云々

叉手、前席より辯じかけた、讃題の御文について、安心報謝師德の三段は、佛法であり、法度の一段は、王法にして、我が淨土眞宗は、佛法と王法、卽ち王法を以て、表とし、佛法は、内心に深くたくはへよ、とあるが、覺如上人の御教化に依りて、うかゞふ領解文の、大意と云ふことは、はや、お話が濟みましたから、今席では、存覺様の御教化を、めがねとして、談ずることに致します。其存覺様の御教化とは、我が高祖大師の一流は、安心報謝師德法度、此四段の中、初めの一段を、安心として、後の三段を、報謝に攝め、安心と報謝のほかは無いぞ、と仰せられた。卽ち『報恩記』に、孝養父母と、奉事師長とを、明かし給ひ、孝養父母とは、父母の恩を仰ぎ、

孝心を盡して、親をやしなふこと、奉事師長とは、佛の大悲を仰信し、祖師善知識の御恩を喜び、佛恩師恩を報ずること、卽ち、此の佛恩師恩を報ずる身となれば、必ず父母の恩を喜ぶやうに成る、此の父母の恩を報ずる身となれば、屹度、國の親樣たる、皇室の御恩を仰ぐ、そこで、報謝の本は孝行にあり、特に、我が國にありては、孝は百行の基也とも、忠臣は孝子の門より出づとも、申しまして、同じ忠孝を談ずる、支那や印度とは、國體が異ひますから、國の親樣に孝なるを、忠と云ひ、君に忠なる子を見て、父母は、孝行者よでかしたり、と喜ぶ。また恐れながら、上陛下に於かせられては、父母に孝々なる人民を見給ひて、朕が忠良なる國民よと、御滿足遊ばされる。依之佛智を信じ師教を仰ぎ、父母の恩を報ずる身とな

れば、世間に對してぬかりは無い、一切の道德は皆之れ枝葉、孝行を以て、王法仁義の根本とす、此故に、報謝も、師德も、法度も、一つの報謝として、法度と云ふも、掟と云ふも、遂には父母の恩に約め給ふ。時に、此親の恩に就ても、普通一般に沙汰する恩也、また、儒教などに談ずる恩と、我が佛教に教ふる恩とは、同じやうに思ふては相成りませぬぞ。彼等の言ふ、父母の恩は、唯だ、この世に生みおとして貰ひ、養育して貰つた恩があるから、孝行せねばならぬ、と說く。皆さん、之れでは、不幸にして、產みおとすなり、兩親には死に別れ、他人の手に養育された人は、育ての親の恩ばかりを思ふて、うみの親には、恩は無いと、空うそぶいてもよいことゝなる、夫れでは、萬物の靈長たる人間とは申されませぬぞ。我が

佛教に教ふるところは、すでに、善導大師、『觀經』の孝養父母を、御釋の下に、「父なくんば能生の因かげなん、母なくんば所生の緣そむきなん、もし父母なきときは、托生の地なし、」と御教化成されてある。中有にうろつく此たまし、人間として現世に出て來たは、父と母とが大きな因緣、父無ければ因ひらけず、母無ければ宿りどころが無い、父と母との因緣により、母の胎內に宿りた我等、此道理が知られたら、現世に產みおとして貰つた丈けでも、父母の恩は廣大無邊である、うかゝした心得では、相濟まぬ次第ぢやと、懇ろに御教化下されましたぞ。まして、產まれてからが、仲々容易なことではない、漸く七歲まで養育すれば、さあ夫れから初等教育、過去から人間界へ引き出し、七歲からは家庭と學園、父母は慈悲先生

は智慧、家庭は温情學園は規則、そこで、學校教育に磨かれて、規則正しく勉強する、家庭の温情に抱かれて、身も心も朗らかに發達する、彼是する間に、はや中等學校へ入れねばならぬ、兒童も相當苦勞するが、教へる先生も、勵ます父母も、倶に痩せる程の苦勞をする、此寬嚴よろしきを得て、迫々〳〵人間らしき人間となる。丁度、研にかけたる刃物の如く、體が痩せねば魂はきれぬ。尤も、學校教育には、其教授方法が定めてある故、讀本習字數學と、兒童の頭腦に應じて、向上させる。家庭に於ては、油斷なく、學級程度を見て復習させる。イロハ覺えた兒童には、日本で文字覺へるのは、聖德太子の御恩とさとし、イロハニホヘトチリヌルヲ、四十八文字の理は、諸行無常の道理ぞと、終には、佛教の精神をくませ、佛にも御

禮を致し、念佛申す身の上と爲す、之れが、佛教信者の家庭教育と申すもの、卽ち御和讃に、上宮太子方便し、和國の有情にイロハを教へ、如來の悲願を弘宣せり、慶喜奉讃せしむべし、和國の教主とあるからは、教へのつかさ、教育の神様、此教主の聖旨を以て、我等國民を撫育し給ふが、歷代　天皇の大御心、依之、我等國民は、其聖旨を奉體して、忠良なる臣民として、奉公の誠をあらはす爲めには、夫れ〳〵專門の學府に入るか、夫れ相當の業務につくか、其實をあげる様に教育して、未來は彌陀の誓ひにまかせ、命のあらん限りは、國家社會の爲めに、活動する人物とせねばならぬ。而して見れば、過去から現世へ生れたは、父と母との御恩なり、現世で撫育られたは、皇室の御恩なり、現世を迷ひの打ち止めとして、出離

生死の道を知たは、祖師善知識の御恩なり、未來往生成佛の仕合せは、彌陀他力の御恩なり、彌陀大悲の恩德を、報じ奉るを報謝と云ひ、祖師や知識の恩德を、感謝することを師德と云ひ、君の御恩や父母の恩、よく忠によく孝に、仁義道德まで、堅く守るを法度と云ふ。此覺悟こそ眞宗の面目、此身に育てゝ貰ふたは、第一に父母の御恩と、喜ばねばなりませぬ。仍て今讃題の領解文、報謝師德法度の三つを、一つに約めて報謝とすれば、我眞宗は安心と報謝、其一つの報謝を三つに開けば、過去と未來と現在との、彌阿と知識と親様と、お手からお手へうつして下さる、御恩を蒙むる我々なれば、國の親様へは忠勤をつくし、家の親様へは孝養怠らず、能く心得て、恩を報ぜよ、とあるが、存覺様の御意見である。前席でも御話申し

た、前の陸軍參謀次長、また先きの陸軍教育總監たる、陸軍大將眞崎甚三郎閣下の如きは、全國多數の人が、唯だ智勇の人だ、世界孤立と云ふ、未曾有の大國難に直面した、現代の日本には無くてはならぬ、陸軍の一將軍だ、としか見て居らぬやうで有りますが、內心には、深く他力金剛の信心をたくはへた、立派な、見眞大師の御門徒でありますぞ、此のことは、三十年來、幾回となく、不肖なる私を、布教に御招き下された、眞崎將軍の舊里の寺院、佐賀縣神崎郡境野村字、犬童の、妙專寺御住職脩山僧雲師から、委しく承りた次第であります。將軍は、其妙專寺の御門徒にして、同じ犬童の小字新村の、眞崎要七、同きせ子、夫妻の中にうまれ、次の弟彌一さんは、家に在りて實業に從事され、妙專寺のお世話など、誠に忠實な

人である。其次の弟さんは、先きごろまで、橫須賀鎭守府の人事部長で有つた、海軍少將眞崎勝二氏である。其他姉妹が二三人ある。夫れが揃ひも揃ふて孝行な方ばかり、而も將軍を初め、御兄弟皆佛法を仰信し、祖先を大切に崇敬される。御兩親御在世の其時は、將軍を初め、兄弟皆が孝養父母、地方の人が皆感心した。兩親が逝くなられてからは、機會ある毎に、故鄕へ展墓、報恩講や祖先の年忌兩親の法要には、嚴格なる三寶供養、たま〳〵軍務多端にして、歸國の出來ぬ時などは、國元の法要の時間を打合せ、參謀次長の時代も、敎育總監の時代も、「私は遙かにこちらから、御禮を申し上げます」其書面を拜見して、覺へず私は感激の涙に、むせんだことがあります。最近も脩山師から承りましたことであるが、今はじまりた

ことでは無い、少尉中尉大尉、少佐中佐大佐、少將中將に成られた時も、何時も屹度勤められたのであるが、先般陸軍大將となられた時、大禮服を新調して、態々、犬童の實家に歸られ、其大禮服を初めて着用なされ、先づ第一に、妙專寺の本堂に、參拜燒香ありて、御住職に御挨拶、夫れから、祖先や兩親の墓參り、再び妙專寺の庫裏に入り、「御院主樣、不肖な私が今日あるは、上陛下の御恩とは申しながら、一面佛祖の御冥護、父祖養育の御蔭、就ては甚だ勝手ながら、明日は奉告法要として、御讀經を御願ひ申します」脩山師も快諾せられ、翌日は同家に參られた、ところが、其送迎は、眞崎將軍自ら、而も禮服着用して、長い讀經の間、軍人だから、膝も痛からうに、親族兄弟諸共に、嚴格に正座して、禮拜燒香成され、さて、

お經も果て、あとのお齋は、將軍自らお招伴、其翌日は、佐賀藩主を祠る、佐賀神社に參拜せられた、と云ふこと。其後、次弟彌一さんのお話に、先日兄が歸りました時、「おまへの家では、朝晩佛前の御禮は、家内一同皆して居るか」と申しますから、「ハイ私等は御禮するが、若い子供等は、上の學校に進む程、段々御禮もせぬやうに成る」と申しましたら、「そりやいかぬ、現今は日本精神とか、自力更生とか、言ふては居るが、佛も信ぜず、神もあがめず、先祖や父母の御恩も思はず、何點に日本精神があるか。自身は、東京に住居はするが、婦人子供に至るまで、御禮は勿論、『正信偈』『御和讃』位ひ、皆いたゞくぞ」、「誠に兄の言葉には、恐れ入つて居ります」、と曰れたとある。何と皆さん、ありがたく、尊とき眞崎將軍の如きは、

特に思想國難の秋、我々國民として、殊に眞宗門徒として、何とした慶ばしいことでありましやう。實に此將軍の如き、眞宗門徒の龜鑑、內心佛法外相王法、安心報謝の精神を、如實に體得成さる、昭和の生きた妙好人。經には、慈父の恩の高きこと山王の如し、悲母の恩深きこと大海の如し、と說き、修身齊家治國平天下、皆な是れ孝道に基くとは、古來聖賢の敎なり、殊に一流安心の行者は、過去未來現在の、業障一時に消滅して、現に正定聚不退の位、生きて生き甲斐あり、死して死に甲斐ある、人間に生れ甲斐のある、大幸福の身と成つたは、家に在つては父母の恩、國に在つては、皇室の恩、敎へ給ふは祖師善知識の恩、どちら向いても三世の鴻恩、身を粉にしても骨くだきても、報じ飽き無き御恩なら、身分の高下貧富の差別、よしやかはりが有ふ共「父母の恩をばふかく報ずべし、彌陀たのむ身に育てたまへば、先づ第一に父母に孝に、俱に同信念佛して、朝家の御ため、國民のため、念佛諸共活動するが、如來聖人の本意にかなふ、眞宗門徒の生活と申すもの。また、眞崎將軍を、御同朋御同行、とさせていたゞく、身の仕合せで有ります。

第十二席

モロ〳〵ノ雜行雜修自力ノ心ヲフリステ、一心ニ阿彌陀如來、ワレラガ今度ノ一大事ノ後生、御タスケ候ヘトタノミ申シテ候。云々

叉手、引きつゞいて聽聞の領解文、御文總體に付いての大意は、前席に於て、お話しが濟みましたから、このお座より、安心の大意

と、報謝の大意、師德の大意、法度の大意とに付いて、お取次ぎに及ぶつもりでありますから、御一同大切に聽聞していたゞき度い。先づ初めに、安心の大意とは、我が淨土眞宗に於ける、一流安心のおほよそのわけ、と申す意味である。さて、安心と申す文字は、普通世の中では、安心と讀ませて、心の安まることを、安心と申して居ります。此故に、安と云ふ字は、安置とも、安穩とも、安定とも、安易とも、續く文字にして、安置とは、おちつけて置くこと、安穩とは、無事穩かなこと、安定とは、おちつき安んずること、安易とは、たやすいこと、世の中一般、生きとし生けるもの、皆悉く、この、おちついて、事なく穩かに、安心して、何時までも、たやすく生きて居り度いと、希望せざる者は、一人もありませぬ。乍併、上

も下も、貴ときも賤しきも、富める人も貧しき人も、老いも若いも、男子も婦人も、其希望通りおもはく通り、眞實安心して、滿足が出來た、と言へるものが有りましやうか。唯だ、黃金や、權利や、名譽やに依つてのみ、此の希望を滿たさんとするものには、おそらくは、一人もありますまい。其證據は眼に見る通り、全世界の人類と云ふ人類、皆悉くおちつきなく、不穩な空氣が充滿して、安定どころか、不安の淵に、時々刻々に沈みゆき、今や全世界の各國が、皆一樣にゆきづまり、人間至るところ餘樂なく、唯だ愁嘆の聲のみを聞く。皆さん、此の不穩な空氣を、不安な雲も、消し飛ばした其上に、おちついて、力強く生きる人を出し、其人によりて、鬪爭の世界を轉じて、平和な樂園と爲さしむる、廣大無邊の利益を顯はすの

が、吾眞宗の安心であります。卽ち、一般普通總ての人の希望して居る安心は、一流の安心に住してのみ、眞實に獲得せらるゝのであります。而して見れば、病みぼうけの氣慰めや、老耄の遊戲だと、片付けては相成りませぬぞ。此頃、世の中の人も、稍眼が醒めかけたと見へて、ヤレ宗教復興だ、ヤレ佛教研究だと、新聞に雜誌に、ラヂオ放送に、耳をかたむけ、眼を向けるやうには、相成りました が何分、之れは一大事の問題だと、眞劍味を以て、求むる人は少なくして、時代の思潮として、宗教のことも、少しは辨へて居らねば、世間の交際も出來ぬ、と云つたやうな、氣持の人が多くは無いかと、思はれます。中興蓮如上人の御言葉に、聽聞を申すも、大略我がためとは思はず、動もすれば、法文の一つをも聞き覺えて、人に賣心

とある。此御遺訓は、現代の吾等に、深き反省を與へ給ふものとして、私は常に心口に奉讀致して居ります。先年、梅原眞隆さんの、『歎異鈔』の放送講義は、誠に有り難く拜聽致しましたが、同じ御講義は聞きながらも、きゝてによりて、種々な批評や、惡口を云ふ者も、少なくない、中には、「今朝(九月六日)の聖典講義中、『將來は暗澹として、コンメイの現在があるのみ、只死を以て云云』とは何だ。吾々青年は、もつと積極的な明朗な語を以て、此世を解し度い、厭世的な文句は、決して吾々青年を生かす道ではない、聖典講義勿論結構なるも、死を讃美するが如き辭句は今後止めて貰ひ度し、一青年よりし」として、梅原さんに、申込んだお人も有る容子。兎角大多數の人が、死と云ふ言葉があれば、直ぐに厭世と片付け、一大事と聞け

ば、また後生の話かと、講義の精神も、法話の意味も、全く他人ごとに聞き流す、之れでは、いかなる高僧の聖典講義も、善知識の御教化も、何の所詮もありませぬぞ。全體、吾々が現世に生れ出て、生き度い思ひ一ぱいに、張切つた氣分で居るからと言つて、生の終焉たる死といふことが、決して遠慮するものでもなし、消えて無くなるものでもない、死は萬人の欲しないこと、後生より現世に執着が深い、青年だけではない。老人かとて死に度くはない、しかし、いかに死はきらいでも、事實は、時々刻々、其いやな死に、近づきつゝあることは、嚴かなる問題であります。此の嚴かなる事實に、眼をつぶつて、盲目的な希望から、宗教を理解して、朗かに生きやう、佛教を聞いて、おちつき度い、夫れは眞實に

正しく、生きぬくと云ふ道ではありませぬ。死と云ふことが、厭やであればあるほど、其厭やな死をハッキリと、視つめて、それを横にたちきつて、生きるみとめをつけるこそ、積極的であり、且つ、徹底した、生を求める眞の宗教に依つて、死をとほして生きる、安心決定の出來た、幸福な人と申されます。して見れば、死を引きよせ、後生の一大事を心にかけて、佛法を聞けよと云ふお言葉は、取りも直さず、眞實朗かに生きるの道は之れより外には、決して無いぞよと、大悲あふるゝ佛の御聲であります。そこで、佛法と申しても、かねて聽聞の通り、難行道あり易行道あり、聖道門あり淨土門あり、自力あり他力あり、其中、難行聖道自力の法は、行諸難行久乃可得、十信十住十行十廻向十地等覺妙覺の、五十二段の山坂を、

智慧の眼と修行の足とで、願行成就と登らにやならぬ。夫れ故、華嚴宗では、見聞解行證入と教へ、天台宗では、發大心修大行、眞言宗では、正解行願三摩地とたて給ふ。各名目のかはりはあれど、詮ずるところは、知つたばかりでは駄目、願をおこせば、其教への如く、修行成就せねば、とても安心は爲きませぬ。皆さん、遠い土地でも無い、華嚴宗の水上は、奈良の東大寺、天台宗の水上は、比叡山延暦寺、眞言宗の水上は、高野山金剛峰寺、高僧知識も數々御座る、あなたの御宗旨の安心で、私が安定の出來るやう、教へ給へと尋ねて見なされ、必ず教へて下されます。先づ第一番に、いとしかわらうが、奥さんに去り狀書いて、可愛お子さんも振り離し、慾をはなれて、瞋恚もやめて、愚痴な心を持たぬやう、きれいに頭髪剃り

て、坊主におなり、さうしてあとは如何致します。夫れから、人里離れた山中で、散り來る木の葉を友として、谷の水音たよりにて、苔むす岩に座禪して、修行戒行勤めたら、本宗の安心が得られるぞ。とても出來ることではない、末世の我等は、仲々思ひたてませぬな。然るに、易行淨土他力の一門は、其の願を發す智慧も無く、修行成就する足も無き我等末代凡夫の爲めに、阿彌陀如來、深重の誓願を發し給ひ、五劫に思惟して、願をおこし、永劫に之をつとめて、修行成就せしめ給ひ、其の五劫思惟の願が、我等凡夫の智眼とかはり、永劫成就の大行が、此私の行足にかはる、此故に、無明長夜の燈炬なり、智眼くらしとかなしむな、生死大海の船筏なり、罪障おもしとなげかざれ。此御和讃のお意は、初めの二句は、南無の二字、後

の二句は、阿彌陀佛、願は卽ち南無の二字、行は卽ち阿彌陀佛、二字と四字とに願行具足、これを我等にあたへ給ふが故に、鬼が佛のはや替り、凡夫が轉じて佛となる。證據が卽ち南無阿彌陀佛、依之、我が易行他力の淨土眞宗は、其の名號を聞いて信心歡喜する、之れよりほかには、一流の安心はなきなり、と敎へ給ふが、見眞大師の御敎化であります。是れを中興蓮如上人は、今の世は、すなはち、末法なればたゞ諸宗の敎門はあれども、まことに行をたて、證をうるひとはまれなるべし、されば、智慧をみがきて、煩惱を斷ぜんこともかなひがたく、心をしづめて、禪定を修せんこともありがたし、こゝに念佛往生の一門は、末代相應の要法決定往生の正因なり、と御讃嘆成されて御座る。餘り長くなりますから、心殘りは次席に辯

じます。

第十三席

モロ〳〵ノ雜行雜修自力ノ心ヲフリステ、一心ニ阿彌陀如來、ワレラガ今度ノ一大事ノ後生御タスケ候ヘトタノミ申シテ候。云々

叉手、引き續いて、一流安心の大意を、御取次ぎ申上げます。そも〳〵、諸佛の敎道、菩薩の正法、其數極めて多しといへども、末代濁世の私共は、何れの敎法にても及びがたく、唯だ、見眞大師御一流の、聞其名號の信心に住する、之れよりほかには、出離解脫の眞因、根機相應の要法はありませぬ。元來、聖道の諸敎は、智目と行足とが、揃はねばならぬ。智目とは、さとりを開くに、必要なる

智慧を、目に喩へたもの、行足とは、さとりに至る行業を、足に喩へたこと。所謂、天台宗などでも、教相判釋して義解を開き、佛道を明にする教門を、智目といひ、觀心修行して、淺より深に進み、卑より高に登り、證道の覺慧を發す觀門を、行足といふ。此二つが具足して、初めて、淸凉地に至ると、談ずるやうに、華嚴宗でも、法相宗でも、三論宗でも、皆な此の二つが揃はねば、一宗の安心は得られぬとある。然るに、末代の我等には、悲しいかな、此の二つの一つも無い。すでに、道綽禪師は「由去大聖遙遠」とも、「由理深懈微」とも仰せられて、「由理深解微」とは、濁世の故にと謂ふ御教化。また、曇鸞大師は、「五濁之世無佛時、求阿鞞跋致爲難」と、のたまい。五濁の世

とは、五濁とは、「劫濁見濁煩惱濁衆生濁命濁」いまはしきことばかり增長して、あさましい末法の今日の世の中。無佛の時とは、末代といふこと、末代とは、佛滅後正法像法の二時、千五百年を過ぎし、末法萬年の今の時。阿鞞跋致とは、不退とも、不退轉とも、無退とも譯して、卽ち、迷ひをはなれて、佛に成るに定まりて、菩薩の地位から、再び、生死の凡夫に、退くことの無い位を、阿鞞跋致と云ふ。爲難とは、仲々出來ることではない、との御教化。爰を御和讃にも、「鸞師ノオシヘヲウケツタエ、綽和尙ハモロトモニ、在此起心立行ハ、此是自力トサタメタリ、」末代濁世の此娑婆で、菩提の心を起しても、修行戒行にはかゝりても、夫れは自力で駄目ぢやぞよ、何故に自力は駄目ですか、時機相應せぬ故ぢや、時は末代機は下根、

智目行足具足せず、どうしてみとめがつくものか、と仰る御教化でありります。之れも曇鸞大師や、道綽禪師の、勝手な議論では決して無い、「末法五濁ノ衆生ハ、聖道ノ修行セシムトモ、ヒトリモ證ヲエジトコソ、教主世尊ハトキタマフ」と、たしかに、大聖釋迦牟尼世尊、『大集經』の御演說に、「我末法時中億々衆生起行修道未有一人得者」と、お說きなされて御座る。然るに、今、他力の行願は、かぐるところ無く、佛體に成就し給ふが故に、此の二つの難は免れますぞ。之れに依つて、源信和尙は、「夫レ往生極樂ノ教行ハ、濁世末代ノ目足ナリ、」と仰せられて、唯だ此彌陀一法ばかりが、通入する道なるが故に、可通入路と教へ給ふが、御相承の御教化であります。時に濁世末代の目濁とは、濁世とは、五濁惡世、末代とは、無佛の今、

智目行足かげたる我等に、代りて大悲の阿彌陀如來、五劫思惟の發願が、直ぐに私の智目となり、兆載永劫の御修行が、卽ち凡夫の行足となる、と仰る御教化であります。しかし、阿彌陀如來の願行も眞實にましまさずば、果を尅することは能はず、此故に、眞實心の中に作し給ふ。又、境智合せずば、涅槃の因とならず、此故に、法性に隨順し、法本にそむかず、と明かし給ふ。又、衆生を目あてと成さらぬ願行なら、我等が往生の願行とはならず、此故に、廻向を主として、大悲心を成就し給ふ。其の起り由來のことを、佛願の生起と仰せられる。又、此願行が、御本願の中で、一番肝要な御誓ひで無ければ、凡夫の心中に徹到しませぬ。又、全德施名で無かつたら、受用するに由なし。之れに依つて、『大經』には、「以大莊嚴具足衆行

令諸衆生功德成就と說き給ひ、以大莊嚴とは、五劫思惟の御發願、具足衆行とは、兆載永劫の御修行、衆行とは、萬行を一名號におさめ給ふたこと、其の一行におさめ給ふは、五劫思惟の願功による。元より、永劫の御修行も、唯だ、一願心中におさまる。此故に、經には、「吾レ誓フ佛ヲ得ンニ、普ク此ノ願ヲ行ジテ、一切ノ恐懼ノ爲ニ大安ヲ作サン」と說き給ひ、如來大悲の根元は、正しく此のお誓ひにありますぞ。そこで、其の一行とし給ひし名號は、全く、我等一切苦惱の衆生に、やり度いばかりの御親切。之れに依つて、彌陀直說の重誓偈には、「衆ノ爲ニ法藏ヲ開キ、廣ク功德ノ寶ヲ施シ、常ニ大衆ノ中ニ於テ、說法獅子吼セン」と說き給ふ。初めの二句は、彌陀教なり、後の二句は、釋迦教なり。「衆ノ爲ニ法藏ヲ開キ廣ク功

德ノ寶ヲ施ス」とは、第十八願。「常ニ大衆ノ中ニ於テ說法獅子吼セン」とは、第十七願。功德の寶の施しやうは、「常ニ大衆ノ中ニ於テ、說法獅子吼シテ」施こし給ふ。そのお役目か釋迦牟尼如來、そのまた獅子吼し給ふところ、一つとして彌陀教に異ふこと無し、夫故、大寂定に入り給ふ。さりながら、能讚所讚の相違はあるから、如來の德を行じ給へり。釋迦如來と彌陀如來、二にして不二なるが故に、大寂定に入り給ふ。又、不二にして二なるが故に、如來の德を行じ給ふ。すでに、高祖大師は、教卷の初めに、「夫レ眞實ノ教ヲ顯サバ、則チ大無量壽經是ナリ、斯ノ經ノ大意ハ彌陀、誓ヲ超發シテ、廣ク法藏ヲ開キテ、凡小ヲ哀ンデ、選ンデ功德ノ寶ヲ施スコトヲ致ス。釋迦世ニ出興シタマヒ、道教ヲ光闡シテ、群萌ヲ拯ヒ、惠ムニ眞實

之利ヲ以テセント欲シテナリ、是ヲ以テ、如來ノ本願ヲ說クヲ、經ノ宗致ト爲ス、卽チ佛ノ名號ヲ以テ、經ノ體ト爲スナリ」と仰せられ。行卷には、初め、第十七願をお引きなされ、直ぐに其の次ぎに、「我レ佛道ヲ成ズルニ至リテ、名聲十方ニ超エ、究竟シテ聞ユル所靡クバ、誓ヒテ正覺ヲ成ゼジ」と、重誓の偈文を、お示し成されてある。最も此の重誓は、すでに、第十七願において、「設ヒ我佛ヲ得ンニ、十方世界ノ無量ノ諸佛、悉ク咨嗟シテ、我名ヲ稱セズバ、正覺ヲ取ラズ」と誓ひ給へば、同じことを、二度も繰りかへされたやうに見へますが、決して無用の重誓では無い、此お誓ひの起りたのは、無善の凡夫に、無上の功德、與へてやり度いが、大悲の目的、往相廻向の要なるが故に、願に願を重ね、誓ひに誓ひを重ね、「名聲十方ニ超エ、究竟シテ聞ユル所靡クバ、誓ヒテ正覺ヲ成ゼジ」遂に其の誓願が貫徹して、「常ニ大衆ノ中ニ於テ、說法獅子吼シタマフ」こゝを正信偈には、重誓名聲聞十方、「重ネテ誓フラクハ名聲十方ニ聞エン」と、名號の德として、一切の我等に廻施し給ふ。斯かるおしかけがあればこそ、釋迦如來は、成就の文に、十方恒沙の諸佛如來、「皆共ニ無量壽佛ノ威神功德ノ不可思議ナルヲ讚嘆シタマフ、諸有ノ衆生、其ノ名號ヲ聞キテ、信心歡喜シ乃至一念セン、至心ニ廻向シタマヘリ、彼ノ國ニ生レント願ズレバ、卽チ往生ヲ得不退轉ニ住セン」と御說きなされて御座る。之れに依つて、我大師は、聞其名號の信心を以て、一流安心の至極と敎へ給ふ。最もこれは、我大師丈けの勝手では無い、三國相承の七高僧、龍樹菩薩を初めとして、

天親菩薩曇鸞大師、道綽禪師善導大師、源信和尚法然上人、皆な、此本願成就の御文を以て、眞宗興行の肝要とし給ふ。此故に、信卷には、聞其名號の聞を釋して、「聞ト言フハ、衆生、佛願ノ生起、本末ヲ聞キテ疑心有ルコト無シ、是ヲ聞ト曰フナリ」と御教化下され。また、正信偈には、聞信如來弘誓願、如來ノ弘誓願ヲ聞信スレバ、佛ハ廣大勝解ノ者ト言へリ」と御知らせ下されます。此お意を、『改邪鈔』には、「カノ信心ヲ獲得センコト、念佛往生ノ願成就ノ、信心歡喜乃至一念等ノ文ヲモテ、依憑トス、コノホカイマダキカズ」とも。「ソレ淨土一門ニツイテ、光明寺ノ和尚ノ御釋ヲウカゞフニ、安心起行作業ノ三アリトミヘタリ、ソノウチ起行作業ノ篇ヲバ、ナヲ方便ノカタトサシオイテ、往生淨土ノ正因ハ、安心ヲモテ定得スヘ

キヨシヲ、釋成セラル、條顯然ナリ、シカルニ、ワガ大師聖人、コノユヘヲモテ、他力ノ安心ヲサキトシマシマス。ソレニツイテ三經ノ安心アリ、ソノナカニ大經ヲモテ眞實トセラル。大經ノナカニハ、第十八ノ願ヲモテ本トス。十八ノ願ニトリテハ、マタ願成就ヲモテ至極トス。信心歡喜乃至一念ヲモテ、他力ノ安心トオホシメサル、ユヘナリ」とお知らせ下された。此故に、中興上人も、御一代の御教化は、本願成就の御文を以て、機受安心の至極として、安くお聞かせ下されましたぞ。八十通の御文章でも、聞けと言ふお言葉は、僅かに、十七八ケ處なれども、どの御文章をいたゞいても、成就の御文をすはりとして、懇ろに御教化下されてあります。たま〳〵、信心獲得章の如きは、「信心獲得ストイフハ、第十八ノ願ノコ、ロウ

ルナリ」とあるから、定則外れのやうにも見へますが、直ぐに、次ぎの御文には、「此願ヲコ、ロウルトイフハ、南無阿彌陀佛ノスガタヲコ、ロウルナリ」と仰せられて、矢張りおすはりは、成就の御文であります。成る程、高祖大師信卷の御敎化も、中興上人の御敎化通り、本卷は、第十八願を明かし給ひ、末卷は、成就の御文、卽ち南無阿彌陀佛のすがたを、御知らせなされて下されましたぞ。さあ皆さん、聖道門の諸敎に在りては、大小權實皆な共に、自性を尊ぶ宗旨なれば、觀心を以て、安心の至極とする。今我が淨土の眞宗は、修得を仰ぐ御宗旨なれば、聞其名號の一念に、絕對他力の安心を決定する、之れ元と、法の不同によつて、觀心と聞名との不同がある。夫れにつけても私達は、結構な御法にあはせていたゞきましたネ、

お互に喜びましやうぞ、『最要鈔』には何と仰る、「往生ホドノ一大事ヲ、ヤブレヤスキ凡情ヲモテ、治定するぞ、と申せば、其の次ぎに、「ワガカシコクテ信ズル心ニテ治定スベキニアラズ」夫では如何しアラズ、聞其名號トイフ聞ハ、善知識ニアフテ、如來ノ他力ヲモテ、往生治定スル道理ヲ、キ、サダムルノ聞ナリ」此故にまた、「祖師親鸞聖人ノ御釋ニモ、本願ノ生起本末ヲキクベシトミエタリ、經釋スデニ聞ヲモテ詮要トセラレタリ、ヨクキクトコロニテ、往生ノ心行ヲ獲得スル條顯然ナリ」と御敎化なし下されてあります。意のこりは、次席にて。

第十四席

モロ〳〵ノ雜行雜修自力ノ心ヲフリステ、一心ニ阿彌陀如來、ワレラガ今度ノ一大事ノ後生御タスケ候ヘトタノミ申シテ候。云々

又手、前々席より、安心の大意を申し述べるに、前席に於ては、聖道諸宗の安心は、觀心を以て至極とし、我が眞宗の安心は、聞名を以て肝要とする、と申し上げましたが、觀心とは、觀心修行と申して、己が心を觀ずれば、是心是れ佛なれば、是心を磨いて、修養向上すれば、必ず證果に至るべしと、修行戒行座禪觀念すること。我が眞宗はさうでは無い、修行の出來ぬ我等が爲めに、成就し給ひし名號を聞き得る一念、信ずる當體、佛の方より、至心廻向と下さるから、卽得往生住不退轉、之れに依て、當流では、聞を以て肝要と仰せらるゝ。最も淨土往生を、目的とする、同じ淨土門中にも、鎭西流や西山流では、夫れ〴〵安心のすはりが違ひます。卽ち、鎭西流では、行信共に自力なるが故に、稱名を勵み、信心を深め、臨終には來迎を待つ。又た、西山流では、佛體卽行とたてゝ、行は他力と云ふが、信は飽くまで、自身發起の歸命と談ずる。然るに、唯だ我が眞宗は、行信共に他力御廻向なるが故に、聞其名號の一念に、絕對他力の安心を成ずる。時に、御當流は、成就文の、聞其名號を以て、安心の至極と成さることは、よくわかりましたが、夫れでは、私共の往生の因を誓はせられた、第十八願とは、相違するのではありませぬか。第十八の因願には、至心信樂欲生とお誓ひなされてあるのに、成就の御文では、聞其名號信心歡喜と、御說きなされたは、如何なるわけで御座りますか。さ、夫れは、元來、第十八願の、至

心信樂欲生の三信は、其出處が、第十七願の、「十方世界ノ無量ノ諸佛、悉ク咨嗟シテ、我名ヲ稱セズバ、正覺ヲ取ラズ」此お誓より出た三信である。此故に、汝より出たるものは、汝にかへる道理にて、乃至十念をたゝめば、三信の中におさまる。其又、三信中の欲生は、信樂を爲體、信樂はまた至心を爲體、至心は、至德の尊號を體とする、「かやのみに入るや碁盤の他力かな」もとへ戻せば、至德の尊號、第十七願の、稱我名者の名號にして、其名號を讃嘆し給ふたが、成就の文の、「無量壽佛ノ威神功德ノ不可思議ナルヲ讃嘆シタマフ、諸有ノ衆生其ノ名號ヲ聞キテ」とある御文なるが故に、決して因願に異なる道理はありませぬ。其の名號を聞くが故に、信心歡喜するのであります。そこで、八十通の御文章でも、成就の文を、お出しな

されたは、一帖十四通目と、三帖の六通目と、五帖の十一通目との、三通丈けでありまして、一帖の十四通目は唯除五逆誹謗正法の、御文章でありますが、三帖の六通目には、「南無阿彌陀佛トイフ六字ハ偏ニワレラガ往生スベキ他力信心ノ謂ヲアラハシタマヘル御名ナリト見エタリ。コノ故ニ願成就ノ文ニハ聞其名號信心歡喜ト說カレタリ。コノ文ノ意ハ其名號ヲ聞キテ信心歡喜ストイヘリ。其名號ヲ聞クトイフハタヾオホヤウニ聞クニアラズ、善知識ニアヒテ南無阿彌陀佛ノ六ノ字ノ謂ヲヨク聞キ開キヌレバ報土ニ往生スベキ他力信心ノ道理ナリト心得ラレタリ。故ニ信心歡喜トイフハ卽チ信心定リヌレバ淨土ノ往生ハ疑ヒ無ク思フテヨロコブコヽロナリ」と仰せられ、又た五帖十一通目の、御正忌の御文章には、「ソモ〳〵信心ノ體

トイフハ經ニイハク聞其名號信心歡喜トイヘリ」と仰せられるばかりで、其他の御文章には、成就の御文は出て無いが、何れの御文章をうかゞふても、底には、何時も、成就の文の義意を以て、御教化成されて下されましたぞ。してみれば、信心を以て肝要と仰やる信心も、正しく成就の文の、聞其名號の信心よりほかには無い。又た、たのむ一念のところ肝要なり、との給ふも、矢張り、成就の文の、信の一念のことであります。然れば、今讃題の領解文に、「タノム一念ノ時往生一定御タスケ治定ト存ジ此上ノ稱名ハ御恩報謝ト存ジョロコビ申シ候」なんどと仰せられたも、全く成就の御文を基礎として給ふ。此のおもむきを御相承成され、現大法主猊下傳燈奉告會を勤修したまふにつき、我等に下された御直諭にも、「凡ソ我一流ノ肝要ハ信心一ニ限レリ、是ヲ知ラザルヲ以テ他門トシ、是ヲ知ラザルヲ以テ他門トシ、是ヲ知レルヲ以テ眞宗ノシルシトテ眞宗ノシルシトハ信心一ニ限レリ、是ヲ知ラザルヲ以テ他門トシ、是ヲ知レルヲ以テ眞宗ノシルシトノ本願ヲ聞信シテ、無疑無慮乘彼願力ノ安心ニ住シ、必至無量光明土ノ身ト爲リ、報謝佛恩ノ行業怠慢無ク、外ニハ國運ノ隆昌社會ノ安寧ニ盡瘁シ、內ニハ佛德ノ讃揚大法ノ宣布ニ努力セラルベク候」と仰せられてある如く、「凡ソ我ガ一流ノ肝要ハ、信心一ツニ限レリ」とは、南無阿彌陀佛を信ずる一つ、卽ち聞其名號の信心ばかりで、「必至無量光明土ノ身」と爲らして頂くから、肝要中の肝要にして、「是ヲ知ラザルヲ以テ他門トシ、是ヲ知レルヲ以テ眞宗ノシルシトス」と、中興上人の御文を引用なされ、「深ク如來ノ本願ヲ聞信シテ」疑ふところなく、慮るところなく、如來の願力他力に乘托して、一

日も早く眞宗の同行たる、安心決定の身となられよと、懇切に御教化下されてあります。斯かる大善知識の教への下に、すなをに領受せられたら、夫れこそまことの安心治定、何時死んでも犬死でない、間違ひなく淨土に生れることの安らかさ、如何に現世の煩はしき、いやな人生のいきさつも、正しく生き抜く力強さ、救はれた生活の利益として、あやまたず生き、平氣で死ねる、眞のおちつき、ほんたうの安心が出來ますぞ。最も、私共には、悲しい業緣がつながりてあるから、種々の惡も種々の禍も、つきまとふては來ませうが、お蔭で、衆惡にも衆禍にもとらはれず、正しく生きさせて頂くばかりか、其悲しさなさけなさを、其儘歡喜の御緣として、慚愧の生活をさせていたゞきます。世の金言にも、「慚愧ノ前ニハ鬪爭ナク、歡

喜ノ中ニハ不足ナシ」世の人一人々々が、みにくき鬪爭をやめて、滿足して正しく生きさせて貰ふたら、是程安穩な、是程安心なことはありませぬぞ。此お意を知らずして、信心ぢや安心ぢやと申せば、直ぐに、あれは後生のこと、未來のこと、今生の生活に安心が出來て、夫から求むる隱居の贅澤、と心得て居る人がある。夫れは大きな誤解である。何故なれば、未來淨土に往生するといふことは、今生に於て決定されるのが、平生業成の御安心なれば、未來丈けのお救けではない、現世も未來も、すべてをお救けにあづかるのであります。現世に於ては、正定聚の位に住し、現に正定聚に住するが故に、未來は必ず滅度に至る。之れに依つて、日々夜々に往生淨土の道中と喜び、時々物々に、慚愧感謝し、禍も轉じて福となし、惡も

轉じて善となす。こゝを高祖大師は、「大悲ノ願船ニ乘ジテ、光明ノ廣海ニ浮ビヌレバ、至德ノ風靜ニ、衆禍ノ波轉ズ」と御讃嘆あらせられました。大悲の願船とは、本願の名號、願船とは、深いお慈悲のこもつた名號を、船にたとへて、願船と仰せられた。乘ずるとは信ずること、御直諭ニ、深ク如來ノ本願ヲ聞信シテ、無疑無慮乘彼願力ノ安心ニ住シ」と仰せられた乘彼願力の乘の字である。「光明ノ廣海」とは、攝取の光明のこと。阿彌陀如來、我等を救ひ給ふと云ふは、名號を以て廻向し、光明を以て攝取し給ふ、之を他力のお救けと云ひます。また「至德ノ風靜ニ」とは、至德とは、至極の功德といふこと、至極の功德とは、此上無しの功德と云ふこと、此上無しの功德とは、卽ち彌陀の名號なり、故に至德との給ふ。「風靜ニ」

とは、廣海を渡る船に、なぞらへてのお言葉。次に、衆禍の波轉ずとは、念佛行者の生活には、幾多數多の禍も、轉じて福となす利益がある、と仰せられたのであります。滿天下の人、此生活する身となれば、個人の幸福、家庭の圓滿、社會の安寧、國家の安全、萬民安堵、皇帝萬歲世界平和も疑無し、之れに依つて大法主猊下も、御繼職の初めより、「深ク如來ノ本願ヲ聞信シテ、無疑無慮乘彼願力ノ安心ニ住シ、必至無量光明土ノ身ト爲リ、報謝佛恩ノ行業怠慢ナク外ニハ、國運ノ隆昌社會ノ安寧ニ盡瘁シ、內ニハ佛德ノ讃揚、大法ノ宣布ニ努力セヨ」と、座毎々々の御敎化なれば、急いで一流の安心に住し、麗はしく生活する身になるが、此法莚にあはれた所詮、之れに過ぎたる喜びはありませぬ。安心の大意はこのくらいにして、

次は報謝の大意を述べませう。

第十五席

モロ〳〵ノ雜行雜修自力ノ心ヲフリステ、一心ニ阿彌陀如來、ワレラガ今度ノ一大事ノ後生御タスケ候ヘトタノミ申シテ候。云々

叉手、前席に於て、安心の大意は、あら〳〵お話しが濟んで、このお座より、報謝の一段に付いて、其の大意をお取りつぎ申します。全體、この報謝とは、報恩謝德とつゞく文字で、卽ち、報恩であります。最も、此の報恩と言ふことは、我が佛教に談ずるばかりでなく、諸教皆な沙汰することにして、儒道と言ふも、神道と言ふも、つゞまるところは、皆な、報恩の外にはありませぬ。所謂、仁義禮

智信の五常も、つゞめてみれば、孝悌忠信の外は無い、之れを、更につゞむれば、孝悌の外なく、それを又も一歩つゞむれば、孝の一字におさまります。此故に、孝ハ百行ノ基ナリ、と申します。大善知識は、「萬卷ノ聖教モ、コレガ爲メニ施スモノナリ」と仰せられる。元來、我が佛教では、忠と言ふも、孝と言ふも、ともに報恩と申して、君の恩、父母の恩、衆生の恩、三寶の恩、此の四恩を報ずべしと教へ給ふ。ところが、儒道の教へでは、たゞ現世丈の報恩にして、一世の恩である。また、神道に教ふるところは、現世と未來との二世の恩。我が佛教の報恩は、恩三世にわたり、報ずること、過去現在未來に及ぶ、しかも、之れは、通佛教の上の沙汰。まして況んや、別途他力の弘願眞宗に於ては、捨此往彼の往相より、還來穢國の還

相まで、悉く、阿彌陀如來の、本願力成就の、廻向ならざるはなく、如何にしても、報恩懈怠の我儘はゆるされません。此故に、「歸命ノ一念發得已後ノ稱禮念ハ、スベテ報恩ナリ」と言ふが、代々の御教化であります。しかし、注意すべきことは、安心と報謝とを混合して、報恩の行を、微塵でも、往生の正因とおしむけたら、起行策勵と言ふ名がついて、御報謝とは名づけられぬ。さりとて、たゞ、往生の正因ばかりをつのりて、報恩の義を廢すれば、之れはまた、大いなる邪見となります。夫れでは、正因は、あつさり聞信して、御報謝を眞劍にはげみますか、いゝや、往生程の一大事の正因は、あくまで、信心一つにかぎるから、あつさりどころか、最も肝要でありますぞ、すでに、御文章にも、「信ズルコヽロダニカハラネバ、スベテタマハズ」と仰せられて、信心一つが、往生の正因ぞと、強く判然と、御教化なされてある。そこで、必ずしも、報恩の勤まる勤まらぬによりて、往生することを得るとか、往生しがたしとか、また、往生の正因が、有るとか無いとか、仰る御教化ではない。往生の正因は、どこ〳〵までも、タノムばかりの御助けである、と言ふて、報恩をさしおさえるは、言語道斷のひがごとであります。いやしくも、報恩門から論ずるときは、鳩に三枝の禮ありで、禽獸ですら、恩をわきまふるのに、歸命の一念に彌陀界に入り、無始已來の大望一時に滿足して、何として、此御恩をゆるがせに出來ませうや。『末燈鈔』に「信心アリトモ名號ヲトナヘザランハ詮ナク候」とのたまひ、次の御言葉には、「一向名號ヲトナフトモ 信心アサクバ 往生シガタ

シ」とあつて、誠にこの御教化には、緩急のあることを、思はねばならぬ、何故なれば、名號を稱へざる邊には、詮なく候と、緩く御誡めなされ、信心あさき邊には、往生しがたしと、屹度お叱りなされてある。古語に「根有リテ葉無キハ時ヲ待ツベシ、葉有リテ根無アリトモ名號ヲ稱ヘザランハ詮ナク候」とは、根が有りて葉の無いのは、時を得て芽を出す如く、信心の根は有りながら、報謝稱名の葉の無いのは、如何にも所詮ないことではないかと、御緣にあえば、あゝほんに懈怠して居りましたと、あやまりはてゝ、御恩の稱名、南無阿彌陀佛〳〵、と報謝の葉が芽だちます。ところが、葉丈有りて根の無いのは、雨が降つても所詮がない、「一向ニ名號ヲトナフト

モ」稱名の葉ばかりで、信心の根の無いのは、往生はかなはぬ道理、此故に、代々善知識は、往生の正因は、信心を以て本とすると、強く懇ろに教へ給ひ、報謝は懈怠に流れるなと、きびしくお諭し下さるのであります。然るに、何ぞやあやまりて、おありがたう御座ります、南無阿彌陀佛〳〵、そりや何か、空念佛のくせに、御報謝のお稱名、まだ早い、信さへ得れば自然に報謝はあらはるゝ、などゝ申すやからがある。實に呆れはてたる暴言、是等は、自然報謝の邪義と言ふもの。自然に報謝の顯はるゝは、八地已上の菩薩か、淨土に至りてのこと。夫れでは一寸お尋ね申します。私は御報謝の稱名は懈怠してはならぬと、餘程心かけましても、兎角相續に怠慢勝ち、之れはまだ眞實の信心が得られて無いかと、一生懸命、こゝろにむ

ちうち、お稱名をはげんで居りますが、如何で御座りませう。さあ夫れは聽聞不足、夫れでは全で、起行づのりの邪義となります。能く聽聞なされよ、高祖大師は、正信偈に、「憶念彌陀佛本願、自然卽時入必定、唯能常稱如來號、應報大悲弘誓恩」との給ひ、初めの二句は信心を勸め、後の二句は、報恩の稱名を知らせ、嚴格に、邪見と懈怠とを、誡め給ふ。爰をまた中興上人は、「一念ヲ以テハ往生治定ノ時尅ト定メ、ソノトキノ命ノブレバ、自然ト多念ニ及ブ道理ナリ」と一念もたて、多念もたて、往生の正因は、必ず一念の信心、報恩は、多念の稱名と、教へ給ふが、見眞大師の御一流であります。時に、稱名することが、何故報恩となるかと申せば、之れは、眞實信心の行者が、稱名致しますれば、他の人之れを聞いて、宿緣の熟

した人は、直ぐに信心を得る、又た、未熟緣の人も、夫れが御緣となりて宿緣潤熟の度を增すから、自然に、大悲の親樣の、攝化衆生を扶助するはたらきがある。此故に、報恩と爲るのであります。大體、稱名とは、稱名讃嘆にして、佛德を讃嘆すること、此讃嘆に、廣讃嘆略讃嘆の二つが有つて、廣讃嘆とは、經典の講義や、說教法話のこと、略讃嘆とは、稱名することと、ところが、此略は、缺略ではない、存略である、此故に、三心五念四修と言ふも、共に名號のほかにはない、唯稱名の一行である。之れに依つて、天親菩薩の五念門も五が、五念門と云ふことを、五念門と仰せられて、五からいへば廣讃嘆、念佛からいへば略讃嘆となる。元來、佛願には、略讃嘆を誓ひ給ひ、乃至十念とあるは、正しく稱名のことであります。

夫故、高祖大師も中興上人も、略讃嘆を勸め給ひ、「コノアリガタサヲ思ハヾ、タヾ南無阿彌陀佛〳〵ト稱フベキモノナリ」此御文章に、タヾとあるは、正信偈の、唯能常稱如來號の、唯の字と同じ意にして、正定之因ハ唯信心、正定之業は、唯稱名と仰る。そこで、他を勸化するときは、廣讃嘆となり、「他力ノ信ノエン人ハ、佛恩報ゼンタメニトテ、如來二種ノ廻向ヲ、十方ニヒトシクヒロムベシ」卽ち自信教人信することゝなる。自身慶喜するときは、略讃嘆となりて、此上の稱名は、御恩報謝と存じ喜び申候。しかし、此の稱名は、また、第十八願の、乃至十念にして、第十七願の、諸佛の稱名と、同格なるが故に、我等が報謝の稱名は、正しく如實讃嘆となります。卽ち、第十七願は、所聞海。第十八願は、能聞海。故に、所聞海へ

かへりて、能行を明すものは、終日能行すれども、所行海を出でず、又た、滿足大悲の、佛の稱名と、我等が報謝の稱名と、同格となるが故に、御恩報謝といふことあやまち無し。何故なれば、諸佛如來はすでに佛果をひらき給へば、別に希望ありて、稱名なさる筈が無い、全く報恩の稱名である。併し、諸佛如來は、何が爲めに、報恩なさるぞ、『般舟三昧經』には、「諸佛如來ハ、念彌陀三昧ニ依テ、等正覺ヲ成ジ給フ」とあつて、南無阿彌陀佛で、正覺を成じ給ふが故に、其恩德を謝せんが爲めに、諸佛各、彌陀の名號を讃嘆し給ふ。其諸佛の稱名と、同格となる、乃至十念の稱名なれば、別に希望が有つては、同格とは言へぬ、往生の大事すでに成辨し畢つたから、たゞ、其所聞海をとり出して、廣大の御恩を、慶喜相續するのが、

乃至十念の稱名である。此故に、中興上人は、「自身往生ノ業トハ思フベカラズ、ヒトヘニ佛恩報盡ノ稱名トコソロウベキモノナリ」と御敎化下されてある。しかし、諸佛如來の稱名は、成る程、衆生化益のおはたらきも有うが、今日の我等が如き稱名も、諸佛の稱名と同格とは、眞實、そんな作用が有りますか、さあ、其作用は必ず有るから、常行大悲の益あり、との給ふ。此常行大悲の益とは、大悲傳普化の益にして、すでに、行卷には、第十七願を指して、「斯ノ願ハ大悲ノ願ヨリ出デタリ」との給ひ、此行卷に仰る、大悲とは、常行大悲と、更にかはるべからず唯一つなり、然らば、大悲とは何か、卽ち佛心なり、佛心とは、大慈悲是なり、大慈悲とは、若不生者の誓願是なり、若不生者ほどのお慈悲は、外には無い、其

大悲より出で給ふたが、「如來無蓋ノ大悲ヲ以テ三界ヲ矜哀シ給フ」其源は、彌陀の大悲に追ひ立てられて、說き給ふたが釋迦如來、此故に、第十七願を指して、「大悲ノ願ナリ」と仰せられた。彼の觀經の下品中生の惡人、五戒八戒及び具足戒を毀犯し、現前の僧物を盜み、僧祇の物を偸み、不淨說法してはづること無く、諸の惡業を以て自から莊嚴する、地獄必定の罪人、臨終一念の夕べにおいて、地獄の猛火一時に責め來り、七轉八倒、虛空を摑んで苦しむ折柄、善知識の大慈悲を以て、其惡人の耳に口寄せ、阿彌陀如來の十力威德と、佛の光明神力とを說き、なほ戒定慧解脫解脫智見を說き給へば、其罪人がかすかに聞きおはるなり、たちどころに、八十億劫の生死の罪を除けり、今迄責め來た地獄の猛火は、忽ち化して淸涼の風、

降り來る炎火が五色の華、華の上には化佛あり、或は苦薩ましく〳〵て、ともに此人を迎接し、落つる地獄が安養淨土の、蓮華の內に往生するとお說きなされた。其時の善知識の大慈悲も、「如來無蓋ノ大悲ヲ以テ、三界ヲ矜哀シタマフ」大悲と同じ大慈悲であります。仍て、今日の僧分が、一席の法話するのも、如來無蓋の大悲に、口をかられる次第であります。法霖師の、「如來ニ口ナシ、法界ノ衆生ノ口ヲカリ給フ」と曰はれたのは、全く、此お意でありませう。然るに、我等が如き、お恥か布い機の手前では、「小慈小悲ノコノ身ニテ有情利益ハ思フマジ」有情利益の爲めなどゝ、讃嘆說法する柄では無い、たゞ、かぎりなき、佛恩の廣大なることを喜び、御報謝の稱名するばかり、ところが、其稱ふる名號の、法德として、有情利益

のはたらきをなす、と仰る。皆さん、何とした尊いことでせう。あの、火藥や煙花の製造に長じた博士級の技術家でも、たゞの白紙をこよりにして、火を點けても、花火は出ぬ。縱令、頑是ない子供でも、中に仕掛けの出來た、線香花火に火を點けたら、パツ〳〵〳〵と、みごとな花火が見られます。今稱名も斯くの如し、いかに諸佛の博士級でも、大悲の願望成就せずば、有情利益の花火はあがらぬ、子供に劣る我等が稱名にも、六字の中にしかけが有る故、「無慚無愧ノコノ身ニテ、マコトノコヽロハナケレドモ、彌陀廻向ノ御名ナレバ、功德ハ十方ニミチタマフ」と立派な花火が顯はれますぞ。之れに依つて、高祖大師は、「男女貴賤コトゞ〳〵ク、彌陀ノ名號稱スルニ、行住座臥モエラバレズ、時所諸緣モサハリナシ」ねたらねながら、

起きたら起きながら、稱名念佛すべきものなり。此意を、中興上人も、「サテコノウヘニハ、タトヒ行住座臥ニ稱名ストモ、彌陀如來ノ御恩ヲ報ジマウス念佛ナリトオモフベキナリ」と御教化下されました。こゝろ殘りは次ぎの席にて。

第十六席

モロ〳〵ノ雜行雜修自力ノ心ヲフリステ、一心ニ阿彌陀如來、ワレラガ今度ノ一大事ノ後生御タスケ候ヘトタノミ申シテ候。云々

引きつゞいておとりつぎに及ぶ領解文、前席より、報謝の大意について、辨ずることでありますが、他力信心の行者、彌陀の名號を稱ふることは、全く報恩の爲めである、と謂ふことは、はやお話が

濟みまして、此のお座では、前席に於て、申しのこして居ることを少しく申述べます。さて、此の名號も、聞其名號と仰せられる時は、往生の正因であります。また、稱我名號と仰せられる時は、報謝の稱名であります。同じ名號でも、正因と、報謝と、わかれます。なほまた、此の名號は、稱へものとして、御成就なされた六字では無い、所聞所信の法體として、御成就なされた、南無阿彌陀佛なるが故に、聞きもの、信じものであります。夫れでは、稱へても、御報謝にはなりませぬか。いゝや、暫らく靜かに聽いて下さい、『歎異鈔』には、「誓願ノ不思議ニヨリテ、持チ易ク稱へ易キ名號ヲ案ジ出シタマヒ」と仰せられて、稱へ易く御成就なされたのが、聞かせ度い、信ぜさせ度いと云ふ、佛の大悲より、發し給ふた第十七願、「我ガ名

ヲ稱ゼズバ正覺ヲ取ラズ」之等のことは、高祖大師、すでに、行卷におあかしなされてあります。そこで、第十七願の稱名から、第十八願成就の文の聞其名號と聞くことが出來る、其のまた聞其名號の信心が、乃至一念の稱名となる、其の稱名を聞くもの、聞其名號の信心に住す。此の故に、第十七願と第十八願は、離れて離れぬ御本願にして、第十七願を聞けば、はや第十八願の信心に住するのであります。「四十八イヅレオロカハナケレドモ、十七八ハ彌陀ノフリソデ」夫れは其の筈、若不生者不取正覺と、おいのちがけのお誓ひぢやもの、してみれば、ふは〳〵したる聽聞では、第十八願の親ごゝろは、聞えるものではありませぬぞ、あなたがお命かけがへなら、「ウハ氣デハナビカヌ彌陀ノフリ袖ヨ、イノチグルメニホレコンデミヨ」

後生を大事と思ひ、佛法を尊ふとく思ふ心あらば、何のやうもなく得られる信心、信心決定の上からは、稱名念佛すべきものなり。斯く聽聞して見れば、連續無窮の誓願を以て、生死海をつくし給ふ御恩德、仰げば仰ぐほどいよ〳〵高く、切れば切るほどいよ〳〵かたし、と申す外はありませぬ。爰を『歎異鈔』には、「マヅ彌陀ノ大悲大願ノ不思議ニタスケラレマヰラセテ、生死ヲ出ヅベシト信ジテ、念佛ノ申サル、モ如來ノ御ハカラヒナリト思ヘバ、少シモ自ラノ計ヒマジハラザルガ故ニ、本願ニ相應シテ眞實報土ニ往生スルナリ」と御敎化なされてある。最も、此の正定業たる稱名を以て、報恩と誨へ給ふに付いては、種々お謂れが有りますれど、此のことは、また、御文に入りてのお取次ぎにゆづります。時に、この稱名は、人

の心意を清淨にし、煩惱を靜め、妄念を止めるはたらきがあります。
およそ、人間一生のあいだには、高貴卑賤の別はあつても、泣くに
泣かれぬやふな、なさけないことや、生きるに生きられぬ、と言ふ
て、死ぬにも死ねぬ、と言ふやうな、苦しい惱ましいことが、屹度
有るものでありますが、是れ皆な、宿世の遠因と、現世の不用意か
ら來る、自業自得の結果で有ります。兎角凡夫の淺間しさは、さ
う、あつさりと諦らめ切れず、他人を怨み社會をのろひ、いかり腹
立ちそねみねたみ、いやが上にも、自から自身を苦しめ、煩悶し悲
觀するものである。彼の一世の麗人と讃へられた方にも、「元結ノシ
マラヌ朝ハ日一日、黑髮サヘモソムクカト思フ」斯うした心境の時
代も有つたのであります。參詣の御婦人方には、定めて御同感の方

もお有りでは無いか、先づ、朝起き出で、鏡台に向つた、頭の髮
を結はんものと、たんねんに髮をすき、いざ、根じめを結んで、結
ひあげやうと、元結をしめてもしめても、頓と、思ふやうに髮が結
へない、とう〳〵、氣持惡しき儘、時間は迫り、氣兼ねはあり、仕
方なく〳〵、結ひあげた髮は、其日一日中、氣持ちがわるく、一本
々々の黑髮が、逆か立ちそむくやうな心地がする、そんな時には、
屹度、胸の中に、瞋恚の炎か、愚痴貪慾の浪かゞ、くすぼり、うづ
まいて居りましやうがナ。さうした時にも、一遍の稱名、南無阿彌
陀佛と……稱ふれば、鈴木政子さんの歌に、「イカニセンイカニセ
バヤト御名ヨベバ、不思議ヤ開ク一筋ノミチ」と詠まれた如く、瞋
恚の炎も、貪慾の浪も、漸く消へて、慚愧となり、やれ耻かしや、

他人ばかり、恨んで居りましたが、腹立たしき相手は、緣であり畑であつた。本と其因種は自身の業因、斯かる罪業にのみ、朝夕まどゐぬる、我が身で我が分を知らぬ徒ら者を、見ぬいて助ける親樣が、ついて護りて下されるとは、泣いて泣いて泣き暮しても、あたゝかい親の懷とは、忘れて居ました、相濟みません、「イダカレテアリトモ知ラズ愚ニモ、ワレ反抗ス大キナル御手ニ」感謝の前には鬪爭なき、朗かな道が開けますぞ、「昨日マデ人ヲウラミシコノ心、ケフハミノリニ近ヅキニケリ」腹立轉じて慚愧となり、愚痴が變じて歡喜となり、貪瞋煩惱のうづまきも、淺間しき世の荒浪も、笑つて乘り切る力强き、幸福な生活が出來ますぞ。今は昔、明治二十七八年の日淸戰爭も、我國の大勝利となり、媾和談判もまとまり、明治天皇

に於かせられても、廣島の大本營にて、はじめて大御心を安め給ひ、陸海軍の將卒は、追々凱旋する、戰勝奉祝の　天機奉伺者には、拜謁仰せつけられる、實にあの時の空氣は、眞に、上下一致、國家をあげての、歡びに滿ち〳〵ました。其時、鬼將軍と仇名された、其當時の海軍の責任者、樺山大將は、天機奉伺の爲め、大本營へ伺候せられた、丁度、其日に、東本願寺を代表して、大本營に伺候した、小栗憲一和上と、一緒になられた、此の小栗和上は、其の頃こそ、一派の學匠としておさまりて居られたが、明治初年には朝廷に仕へて、坊さん頭に、俄まげ結ふて、政府に勤めたこともあり、樺山大將とは、其の當時からの朋輩であつた。久しぶりの邂逅に、双方挨拶が濟むなり、樺山大將が、「小栗君矢張り出たぞ」。感慨深げに言は

れるので、小栗和上も面喰つて、「何が出たのか」、と言はれると、樺山大將は、ニコリともせず、「不思議なものが出おつた、實は、其の當時から、貴公の顏を見る今迄、頓と忘れて居たものが出た、實に不思議だ」。小栗和上は、薩張り譯がわからぬ、「樺山君一體何が出たのだ、君にも似合はぬ、臆病神がとりついて、支那兵のおばけでも、出たと言ふのか」。其の時樺山大將は、「イヤ、そんな馬鹿氣た話しで無い、實は今度の戰爭に、一番心配したのは、我が海軍の不備なことで有つた。敵は堂々たる軍艦もある、何と言つても、立派な武器を以て我軍にあたるが、我が海軍は甚だ貧弱だ、唯だ正義の軍に、大和魂を以て打ち破つたのだ、ところが、隨分苦戰だつた、一時はとても勝算がたゝぬ、萬一我が軍利あらずとなれば、大元帥

陛下に申し譯無く、陸軍が如何に强くとも、糧食彈藥の輸送は絶へる、其上敵を腹背に受け、陸と海からはさみ打たれては、袋の鼠で全滅する、國家の將來は何となる、此樺山は、死して陛下にお詫びも致さうが、嗚呼、死ぬにも死ねず、生きても居れぬ、我が艦隊はいよ〳〵危うい、ウヽン、此上は、サウヂヤ、大楠公の七生報國、此の樺山も、死して御詫び丈では相濟まぬ、七度生れかはりても、大御心を安め奉り度い、斯く覺悟定めた刹那、君が先年あれ程すゝめても、念佛せなんだ此樺山の口から、南無阿彌陀佛〳〵〳〵と、現れたかと思ふと、何だか、精神がドツシリとおちつき、夫れと同時に、敵艦降參の報告を得て、まけと思ふた我が軍の大勝利、日本勝つた萬々歲、夫れつきり、實は、今、君の顏見るまで、お念佛は

忘れて居たが、お念佛は何と言ふ不思議なものか、小栗君、今日は更めて聽聞し度い、賴む」。との言葉に小栗和上、「ム、左樣か、夫れだから、先年來拙僧が言はぬことでは無い。しかし、君の口から現れた稱名こそ、昔から言ふ、鬼の念佛ぢやが、鬼も轉じてほとけにせうと、誓ひ給ひし、大悲招喚の呼聲である。抑、此の名號は、見眞大師の御敎訓に、祈らざれども自ら息災延命の利益もあり、七難消滅の利益もあり、此の世の利益きはも無し、流轉輪廻のつみきへて、定業中天ものぞこほりて、梵王帝釋、諸天善神、四天大王、堅牢地祇、無量の龍神、炎魔法王、五道の冥官、他化天魔王、天神地祇や、惡鬼神、觀音勢至や塵數の菩薩、十方無量の諸佛まで、百重千重圍繞して、よろこびまもり給ふと、仰せられた。なほ、死生の前途は、此の名號の不思議によつて、罪障悉く滅され、極樂淨土に、往生成佛せしめ給ふ。まだあまつさへ、娑婆の國土が氣になれば、この世に還りて還相廻向、護國の活動も思ひの儘ぢや」。此點まで聞いて居られた、樺山大將は、「小栗さん、拙者のやうな念佛ぎらひ、自身が信ぜぬばかりか、隨分惡口まで言つたものだが、之れでも助け給ふか」。「さあ、そこぢや、我が身で我が身の力を知らず、迷ふ我子を呼ぶ親を、親とも思はず逃げ迷ひ、却つて親に背く子ほど、見捨て切れぬが眞實の親だ、諸佛に勝れた彌陀の大悲だ、必ず往生することを得る、樺山さん、之れは小栗の言ひ草ではありませぬ、大聖の眞言、宗祖の敎旨であります。ぞ」。「ハ、ツ、忝ない、小栗さん、貴方は拙者の善知識だ、今後は信じて念佛します」。とのお

言葉に、小栗和上も大きに喜び、「おゝ、樺山さん倶に念佛に生きましやう」、互に堅く手を握り、大本營の別館にて、兩人感激の涙と共に、高聲念佛せられたとある。之れは、小栗和上の直話であります。さあ皆さん、はなやかな一世の麗人も、念佛の前には慚愧あり、豪氣な一代の將軍も、死生の前には御名をよぶ、みにくき自己を知らされては、ゆるして救ふ御親がたより、弱き我身と知られては、强きお慈悲の六字が力、斯かる六字と知られたら、如來大悲の恩を知り、稱名念佛いさむべし。

第十七席

モロ〳〵ノ雜行雜修自力ノ心ヲフリステ、一心ニ阿彌陀如來、ワレラガ今度ノ一大事ノ後生御タスケ候ヘトタノミ申シテ候。云々

又手、此お座におきましては、師德の大意に付いて、お取次に及びます。元來、我が佛教は、本師釋迦一代の說教にして、一切衆生の迷ひの根をきり、大般涅槃のおさとりに、至らしめんが爲めの、教法なれども、愚鈍の凡夫が、得手に拜見して、勝手な眞似をしても。決して利益はありませぬ、利益どころか、却りて大きな迷ひを生じます。爰に於て、必ず、四依の大士、之れを相承して、衆生に利益を施し給ふ。例へば、經文に、父を殺し母を殺せば、眞の解脫を得る、と言ふ御文が有つて、成る程、之れは容易いことだ、むつかしい修行戒行して、造作苦勞することは無い、すまぬことだが、兩親を殺して、眞解脫のさとりを開けば、先づ一番に父母を濟

度する、暫しの不孝はこらえて下され、と言ふて、生みの父母を手にかけて、さとりどころか、現世から其國の大罪人となり、現世も未來も罪のむくい、眞解脫を得ると思ふたのが、五逆罪を犯して、無間の業苦に、墮在したと言ふ、古いお話が殘りて居ります。斯様なとりあやまちがあるから、四依の大士之れを釋して、一切衆生の迷ひの父母は、無明の惑と業との二つ、故に、佛は、其の無明の惑の父を殺し、無明の業の母を殺す、と言ふことを、父を殺し母を殺せば、眞の解脫を得る、と說き給ふ、あやまつて、五逆罪を犯すなよと、懇ろに教へ給ふ。御蔭で、衆生も、佛の本意を得て、如說に修行することが、出來るのであります。此故に、相承と言ふことが、大切であります。相承とは、先師より、後師が、法をうけて、衆生

に其法を傳へること、卽ち、上先師は教授し給ひ、下後師は之れを受持し、其法を以て、法滅退代の時機をうるほすこと。殊に、我が淨土眞宗にあつては、惡人正機の本願にして、無願無行の泥凡夫が、信ずる一つで佛になる、不思議の中の不思議なれば、最も相承を肝要とする。此故に、元祖上人も、『選擇集』には、相承を嚴密にお擧げなされましたぞ。依之、讃題の領解文には、先師の御開山と後師の善知識とをあげて、其の恩德をおあげなされました。之れを卽ち師德と申します。しかし、夫れなれば、三國相承の七高僧を、おあげなされさうなもの、何故に、御開山や善知識ばかりを、おあげなされましたか、さあ、其のことは、すでに、『持名鈔』にも、「タトヒマタ釋尊西天ニイデ、、三部ノ妙典ヲトキ、五祖東漢ニムマレテ西方

ノ往生ヲオシヘタマフトモ、源空親鸞コレヲヒロメタマフコトナク、次第相承ノ善知識コレヲサツケタマハスハ、ワレライカテカ生死ノ根源ヲタヽン」と御教化なされてあります。夫れなら、せめて、此の御ことはり聽聞申しわけ候ふこと、源空上人御出世の御恩、御開山善知識のあさからざる御勸化の御恩、と仰しやりさうなもの、とお思ひになりましやうが。源空上人、卽ち法然さまの御教化丈けでは、隨自意の御教化もあり、隨他意の御すゝめもあり、仲々御教化が混雜して居る。之れはひとり、法然上人ばかりではない、龍樹菩薩天親菩薩、曇鸞大師道綽禪師、善導大師源信和尙、皆な夫れ〴〵に、同じ一法を傳へ給ふといへども、各其風格が異つて居るから、仲々本意は得られませぬ。夫れ故にこそ、法然上人の御弟子方でも、

或は諸善萬行にかゝはつて、十九の願の機にとゞまり、或は自力の稱に執じて、二十の願の域をはなれず、西山鎭西九品長樂寺、其他あまたの流義にわかれたのでありますぞ。然るに、何の造作もなく、何の苦勞もいらず、三經の精神、三佛の正意、七祖の相承たる、第十八願の眞面目、善知識の教への下で、名號聞持の一念に、報土得生の眞因として、容易く獲させていたゞくことは、全く御開山聖人御出世の御恩と、深く感謝せねば相成りませぬ。すでに、念佛正信偈にも、「諸佛ノ護念眞ニ疑ヒ莫シ」とも、「如何ガ斯ノ大願ヲ疑惑センヤ」唯ダ釋迦如實ノ言ヲ信セヨ」とも、「唯ダ斯ノ高僧ノ說ヲ信ス可シ」とものたまひて、彌陀釋迦諸佛三佛の正意、三國相承の七高僧の說、我れも信じて往生するから共に信じて往生せよと、判然お

知らせ下されたは、我が御開山お一人なるが故に、「此ノ御コトハリ聽聞申シワケ候コト、御開山聖人御出世ノ御恩」と、初めに、御開山をおあげなされたのでありますc しかし、果して御開山の御一流が、七高僧の御相承の儘か、法然上人の御正意であるか、と言ふことは、毎々聽聞の通り、「黑谷ノ先德源空在世ノ昔、矜哀ノアマリ、或ルトキハ恩許ヲ蒙リテ製作ヲ見寫シ、或ルトキハ眞筆ヲクダシテ名字ヲ書キ賜ハス」眞宗の肝要念佛の奥義とある御聖教、御名まで書いて御與へなされたは、三百八十餘人の中で、御開山たつた一人でありました。なほ其上に、元祖さまの御眞影に、善導大師の若我成佛の御文を、贊になされて、おゆづり遊ばした。皆さん迂濶お聞きなさいますなよ、一宗安心の奥義を、御傳へなされることは、

なか〳〵以て輕からぬことであります。禪宗の惠可禪師が、達磨大師にむかい給ひて、何卒我れに禪宗の安心を御授け下され度いと、御願ひなされたら、我が法は、以心傳心教外別傳不立文字、と言ふて、お授けが無かつた。そこで惠可禪師は、是非にお授け下され度いと、推してお願ひなされたら、然らば汝身の皮を剝いで紙となし、肋の骨を折りて筆となし、流るゝ血汐を墨として、授くるところを認む可しと、仰せに禪師はかしこまり、忽ち我身の皮を剝いで紙となし、肋の骨を折つて筆となし、流るゝ血汐を墨として、お授かりなされたとある。さうでもあらうか、元祖上人の御弟子は、三百八十餘人まし〳〵たれど、眞宗の肝要たる『選擇集』、御眞影まで添へてお授けなされたは、我が聖人お一人であつた。夫故我御開山、深く御

喜びあらせられ、「眞宗ノ肝要念佛ノ奥義斯レニ攝在セリ、見ル者諭リ易シ、誠ニ是レ稀有最勝ノ華文・無上甚深ノ寶典ナリ」、いよいよ眞宗の肝要念佛の奥義は、此聖教に至極せり、數多三百八十餘人、膝を竝べて聞く中に、此善信に御付屬とは、餘りといふも勿體ない、茲をまた『御傳鈔』に、「是レ專念正業ノ德ナリ、是レ決定往定ノ徵ナリ、仍テ悲喜ノ涙ヲ抑テ由來ノ緣ヲ註スト云云」、御涙にむせばせられて、お喜びなされたとあります。併し、皆さん、御師匠より御聖教の讓りを受けた御開山、唯だいたゞいて、喜んでおいでるばかりでは、無かつたのであります。念佛弘通があだとなり、弟子と師匠をひきわけて、殊に御開山には、奥方もあり、可愛いお稚兒さまもあり、生爪引き裂くやうに、北と南にお別れなされ、雪降り積る越路の御

苦勞、更においとひ遊ばさず、竹の柱の茅屋に、藁でとま葺く埴生の小屋、お頭さへも剃り給はず、上下二卷の御聖教、讓りを受けた此親鸞、御師匠樣の御影まで、添へて貰ふた此身ぢやもの、彌陀選擇の本願を、一天四海におし弘めひでおくべきかと、肉食妻帶を奏にあらはし、在家同容の御行狀、さあ此親鸞がざまをみよ、妻もあるぞよ子もあるぞよ、肴も喰べる酒ものむ、斯んな愚禿も、彌陀たのんで往生する、疑ひ晴れて本願を信ぜよと、有緣の人々を御化導なされましたぞ。ところが、叡山には山王權現の猿があれる、南都には春日の鹿が荒れ廻る、三千坊へ猿が荒れ込んで、太皷を叩き破る、お經を引き破る、木像を取り出して、打ち碎くやら、大騷動、春日の鹿は、興福寺に荒れ込んで、手がつけられぬ。依之、南都に

は、春日明神の神慮を伺ひ、叡山には、山王權現の神意を伺ふたところ、「兩聖人流罪トセシコト神慮ニカナハズ、急ギ歸セヨ」との御神託。於此勅使を以て兩聖人、勅勘御免仰せ渡された。其時、我が御開山、いよ〳〵今こそ時を得たり、御師匠様の本意を遂げ、彌陀選擇の本願を悪世に弘め、信心爲本の旗を擧げんと、思ひ切りて御開山、聖道淨土雜行正行專修雜修自力他力、水際立てゝ御教化下されたが、我が一流の御開山でありますぞ。夫れに付けては滿九十年、生臭坊主と言はれたり、墮落坊主と謗られても、びくとも動かぬ金剛心、謗らば謗れ笑はゞ笑へ、こゝろしらぬ人は何とも言はゞ言へ、身をも惜まじ名をもおしまじ、末代濁世の群生が、愛妻愛子の手を引きながら、御救け計りは間違ひ無いと、安心させる生きた手本ぢや犧牲ぢや、凡夫往生の彌陀の本願、諸佛護念の無上の法門、七祖の相承はこゝにある、御師匠様の御付屬は、いよ〳〵こゝぞと思召し、御一生の御苦勞ぞと、御在世の御恩を思ふに付け、「此御コトハリ聽聞申シワケ候コト、御開山聖人御出世ノ御恩」と御教化下されたも道理であります。猶ほ此御恩德に付いては、眞宗興行之德、本願相應之德、滅後利益之德、此三德を根本として、十德を讃嘆する筈なれども、夫れは又御文に入りてから、申述べましやう。

第十八席

モロ〳〵ノ雜行雜修自力ノ心ヲフリステ、一心ニ阿彌陀如來、ワレラガ今度ノ一大事ノ後生御タスケ候ヘトタノミ申シテ候。云々

叉手、前席よりお取次ぎに及ぶ、師徳に付いて、讃題に、「御開山聖人御出世ノ御恩」と、仰せられたお意については、早やお話が濟みまして、このお座におきましては、「次第相承ノ善知識ノアサカラザル御勸化ノ御恩トアリガタク存ジ候」とある大意を申述べます。次第とは、次第順序と申すことで、聖人の血脈連綿として、正しくつゞくと謂ふこと。相承とは、前席にも申した通り、御開山聖人一流の御教化を、代々の善知識受持し給ひ數多有緣の御門徒を、普く教導遊すこと。善知識とは、種々の謂れもありますが、爰で善知識と仰せられるのは、正しく本願寺代々の御住職、卽ち大法主猊下のことであります。水道の鐵管は、一寸切れても、配水は出來ぬ。如何に、聖人の一流は、諸佛法界に類なき、彌陀祕密の甘露水でも、

次第相承の善知識、朝な夕な御勸化の、御配慮が無かつたら、我等凡惑の枯渴を、うるほすことは出來ませぬぞ。依之、實如上人は、「本寺の住持モツ者ハ、ハシニ目鼻ヲ付タルヤウナルモノナリトモ、皆門徒以下ノ人ハ賞翫スベシト、コ、ロエアガムベシ、聖人ノ御代官ヲ申ス身ニテ候アヒダ、敬ムベキガ肝要ナリ」と仰せられた。特に我が一流の相承は、御開山より血脈が傳はり、其上遺像の御眞影を以て、訶責し給ふ相承なれば、御代々の善知識、末寺門徒にあやまち有れば、罪は御身に引き受けて、之れ予が不德のしからしむるところなりと、身を以て御教化下されますぞ。御代々どなたに甲乙は無けれ共、覺如上人、蓮如上人、本如上人、明如上人、殊に一宗の危急存亡に際して、お命がけの御苦勞下されたことは、皆さんか

ねて聽聞の通り、誠に感謝尊重申上げずには居られませぬ。殊更、現今の我國は、開國以來の容易ならざる非常時なれば、朝家の御為め國民のため、念佛申せの祖訓にしたがひ、王法爲本の實をあげ、上陛下の聖慮を安め奉り、下共存共榮の仁義を守り、內心には深く本願を信じて、必死無量光明土の身となれよと、御繼職の當時より、お聲からして懇ろに、日夜に御教化遊ばされ、御身を以て範を垂れ給ふ、勝如上人光照猊下は、我々老人は勿論、今日の若き人々も、吾等が若き、大法主と仰ぎ、恭敬尊重申し上げましやうぞ。卽ち『持名鈔』に「木像モノイハザレバ、ミヅカラ佛教ヲノベズ、經典クチナケレバ、テヅカラ法門ヲトクコトナシ、コノユヘニ、佛法ヲサヅクル師範ヲモテ、滅後ノ如來トタノムベキガユエナリ」と仰せられ

て學解の左右や、義轍の優劣は、兎もあれ角もあれ、眞俗二諦の御宗意は、嚴肅に、大善知識の御教示通り、信順するよりほかはありませぬぞ。夫れに何ぞやあやまりて、相承の善知識の御教化を無視して、我が身勝手な理屈をならべ、我身があやまるばかりぢや無く、多くの人を惑はす如きは、以ての外の僻事である。「來テ告グル、人ナカリセバ衣手ニ、カヽル玉ヲモ知ラズヤアリケン」大善知識の御教化によらずば、一流の正意は得られませぬぞ。『佛本行經偈』には、「若シ人惡知識ニ親近スレバ、現世ニハ名聞ヲ好ムコトヲ得ズ、必ラズ惡友相親近スルヲ以テ、當來亦タ阿鼻獄ニ墮セン」ときびしくお戒しめなされてある。夫れに反して、善知識に隨順すれば、次ぎの御文に、「若シ人善知識ニ親近シ彼等ノ所業ノ行ニ隨順スレバ現ニ

世間ノ利ヲ證セズト雖、未來ニハ當ニ苦因ヲ盡スコトヲ得ベシ」と
お說きなされましたぞ。また、『歡豫經』には、「善知識ハ乃シ萬福之
基也、現世ニハ王者ノ牢獄ヲ免レ、死シテハ則チ三途之門戸ヲ杜グ、
昇天得道皆ナ善知識ノ助ケナリ」とも、說き給ふ。して見れば、善
知識は、眞暗ら闇の廣い野原に、方角を失ひ、路に迷ふて居る者を
明るい燈を以て路を照し、手をとりて本街道へ、引き出して下さる
やうなお方である。此故にまた『中心經』には、「佛言ク、師恩ヲ知
ル者ハ、師ヲ見ル則バ承事シ、見ザル則バ教誡ヲ思惟スルコト、孝
子ノ父母ヲ念ズルガ如クシ、人ノ飮食ヲ念ズルガ如クセヨ」と說き
給ひて、是が師長につかへておうやまひ申し、決して我が身をたか
ぶらず、師を輕んぜず敬ひ順ふの道ぢやとあります。邊孝先と云ふ

人は、後漢の世に、稀れな學識博達の學者でありました。而して多
くの弟子を育てゝ居られたところが、或る時、其の邊孝先が、晝臥
をせられたら、さあ、弟子共が是を見つけて、口々に嘲けりて、「邊
孝先腹便便、書ヲ讀ムニ懶クシテ但ダ眠ラント欲ス」と、はやした
てる。其時邊孝先は之れを聞きとがめ、弟子共を呼び集め、淳々と
申聞かせるやうは、「腹ノ便便タルハ五經ノ笥ナレバナリ、但眠ラン
ト欲スルハ經ノ義ヲ思フナリ、寢テ周公ト夢ヲ同クシ、靜ニシテ孔
子ト意ヲ同クス、師ヲナンヂ嘲ケルベキ道ハ出テ何レノ典記ニ見エ
タルヤ」と曰はれて、弟子等も大いに愧ぢ入り、こゝろからお詫び
を申し出た、と云ふ話がある。（後漢傳）成る程、弟子として師を侮り我
身をたかぶることは、すでに、師に對する禮を失ふて居る。この意

を『法律三昧經』には、「一ツニハ、學ンデ善權方便ヲ知ラズ、師友ヲ輕慢シテ、一心有ルコト無シ、其意シバ〳〵轉ズ。二ツニハ、學ンデ精進ナラズ道力有ルコト無シ、但名譽ヲ貪リテ、人ノ敬待ヲ望ム。三ツニハ、學所ニ師ニ事ヘテ勤苦ヲ念ゼズ、當ニ成就ヲ得ベシト云テ空シク貢高ヲ飾ル。四ツニハ、學ンデ道ヲ好ミ反リテ異術ヲ持シテ、佛ノ深經ニ比シテ、言同等ナリトイフト」說き給ふ。いかに報じても、敬ふても、盡し難き、師德であるのに、況んや是れを背き棄て、誹謗し罵しりはぢしめる者は、唯だ其のたちばを失ふばかりで無い、やがては必らず惡趣に沈みますぞ。すでに、『大論』には、「人アリ既ニ善知識ヲ得テ、其意ヲ得ズ、反リテ讎隙ヲ成シテ、地獄ニ墮ツ」とも。『大乘方廣摠持經』には、「若シ其ノ法師ヲ誹謗スル

有レバ、卽チ佛ヲ謗ズルト爲ス、等ノ異有ルコト無シ」とも、教誡なされてある。『百喩經』の中に、商賈導師を殺して道に迷ふの緣、と云ふことが出て居ります。と言ふてもわかりますまいが、或る商人が、此不景氣に內地では駄目だ、何でも財寶無盡藏の國に入りて、一と儲けせんものをと、同志を語らい、一人の案內者を覓め、一同連れだつて、遠國に出かけた。途中山を超へ谷を涉り、河を踰へ里を過ぎ、進み行くうちに、或る曠漠たる平野に出た、人家はるかに隔たり、草木は覆い茂り、澤あり沼あり丘もあり、遐に一の祠がある。案內者の說明によれば、此祭神は、齋忌甚だ猛しき荒神さまで、若し此神さまの怒りにふるれば、忽ち風を起こし雨を降らし、旅行者の道を妨げ、災害を與へて皆な死亡させます。唯だ其難を免れる

には、人の肉、屠て牲とし、之れを献ずれば、神之れを受けて、祟りを致しませぬ、と聞いて、商人の一團は協議を始め、さて如何したものであらう、と言ふて、此中で誰れを殺して、神さまに献じやうと云ふ者も無い、故郷を出でゝ遠國に往くからは、年長者を以て此一團の父と致さう、兄上とも定めやう、と言ふ盟約して、出て來た我々ぢやないか、言はゞ皆な親子兄弟ぢや。何として一人でも、殺されるものか、おゝ丁度良いことがある。あの道案内者丈けは、親屬でも兄弟でも無い、可愛想だが彼れを殺さうと、遂に道案内者を殺して、之れを神さまにさゝげ、追々進んで出かけたが、忽ち濃霧覆い塞がり、雨はさかんに降りしきり、行手も知れず還る道も知れず、進むことも退くことも出來ず、其中に時間はたつ、寒さと飢

渴に苦しんで、一人も殘らず死んだといふおはなし。今日の我等も斯の通り、たま〳〵佛法の大海に入り、涅槃の寶を取らうと思へば、善知識の教への案内によらずば、必らず道をあやまちますぞ、然るに師德の恩顧を知らず、却りて知識を謗りおとしめ、善知識を見捨た人は、生死の道に進退谷り、三途苦難にながく沈み、出離の緣あること無し。之れに依つて中興上人も、次第相承の善知識の、あさからざる御勸化の御恩と、ありがたく存じ候、屹度御敎化下された。此の御恩德の深きことは、「恒沙ノ身命ヲステ、モ、ナヲ一句ノ法門ヲキケルムクヒニハオヨバズ」、「佛法ノタメニハ、身命ヲモステ、財寶ヲモオシムベカラズ」と『持名鈔』に御示しなされてあります。